

平成 1 5 年度

独立行政法人国立美術館
東京国立近代美術館

事業報告書

目 次

独立行政法人国立美術館の概要	3
業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	4
国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	
1. 収集・保管	7
(1) 美術作品の収集（購入・寄贈・寄託）の状況	7
(2) 保管の状況	9
(3) 修理の状況	11
2. 公衆への観覧	13
(1) 展覧会の状況	13
本館	16
「常設展」	16
「青木繁と近代日本のロマンティシズム」展（共催展）	19
「牛嶋茂雄」展（特集展示）	21
「地平線の夢 昭和10年代の幻想絵画」（企画展）	23
「野見山暁治」展（共催展）	25
「旅 - 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」（企画展）	27
「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」展（企画展）	30
「国吉康雄」展（共催展）	33
工芸館	35
「常設展」	35
「今日の人形芸術 - 想念の造形」展（共催展）	37
「オーストラリア現代工芸3人展：未知のかたちを求めて」（企画展）	39
「三代藍堂 宮田宏平展 - 金属造形の先駆け」（企画展）	41
「現代の木工作具」展（企画展）	43
「あかり：イサム・ノグチが作った光の彫刻」（特集展示）	46
国立博物館・美術館巡回展	48
「受容と発展：花開く近代洋画」展	
(2) 貸与・特別観覧の状況	49
3. 調査研究	50
4. 教育普及	53
(1) - 1 資料の収集及び公開（閲覧）の状況	58
(1) - 2 広報活動の状況	60
(1) - 3 デジタル化の状況	64
(2) - 1 児童生徒を対象とした事業	66
(2) - 2 講演会等の事業	68
(3) - 1 研修の取組	71
(3) - 2 大学等との連携	72
(3) - 3 ボランティアの活用状況	74
(4) 渉外活動	76
5. その他の入館者サービス	78

独立行政法人国立美術館の概要

【東京国立近代美術館】

1. 目的

東京国立近代美術館は、昭和27年に日本で最初の国立美術館として開館した。当時は、先行するミュージアム施設としては国立博物館のみであり、従って当館は国立博物館に対して、広い意味で同時代の日本美術を常時展観できる近代美術館として性格づけられた。

当館は、竹橋に、本館及び工芸館、京橋にフィルムセンターを有し、世界の近代美術の流れの中で、わが国の近代美術の系譜を跡づけ、広く美術への関心を喚起することを目的として、企画展、常設展等の展覧事業のみならず、20世紀を中心とした近代の美術・工芸作品、映画フィルムや関連資料の収集・保存、内外の美術活動についての継続的な調査研究、教育普及、出版物の刊行等、幅広く事業を行っている。

2. 土地・建物

(1) 本館

建面積	4,511 m ²
延べ面積	17,192 m ²
展示面積	4,599 m ²
収蔵庫面積	1,840 m ²

(2) 工芸館

建面積	929 m ²
延べ面積	1,858 m ²
展示面積	568 m ²
収蔵庫面積	168 m ²

3. 定員（本館、工芸館） 43人（うち本部職員12人を含む。）

4. 予算 1,394,854,408円

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画

- 1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。
 - (1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化
 - (2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進
 - (3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進
 - (4) 外部委託の推進
 - (5) 事務のOA化の推進
 - (6) 連絡システムの構築等による事務の効率化
 - (7) 積極的な一般競争入札を導入
- 2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。

【東京国立近代美術館本館・工芸館】

実 績

1. 業務の一元化
本部において、これまでで行っている人事、共済、給与事務及び情報公開制度の共通的な事務を一元化した。
2. 省エネルギー等（リサイクル）
 - (1) 光熱水量
本館
電力の契約を見直し、季特別料金を導入したことにより経費削減を図った。
省エネルギーに対する職員の意識を確立し、全館でこまめに節電を行った。
ガスの契約を見直し（一般料金 空调用A契約第1種）、経費削減を図った。
ア．電気 使用量 2,531,674kw（前年度比94.8%） 料金 38,817,440円（前年度比92.2%）
イ．水道 使用量 13,110m³（前年度比91.7%） 料金 7,510,584円（前年度比88.6%）
ウ．ガス 使用量 395,701m³（前年度比101.1%） 料金 17,896,708円（前年度比48.0%）
工芸館
ア．電気 使用量 365,919kw（前年度比101.1%） 料金 7,001,820円（前年度比99.7%）
イ．水道 使用量 970m³（前年度比125.3%） 料金 430,140円（前年度比128.4%）
 - (2) 廃棄物処理量
館内LANの活用による職員周知文書や会議開催案内によりペーパーレス化を実施した。
本館
ア．一般廃棄物 13,400Kg（前年度比93.4%） 料金 281,400円（前年度比93.4%）
イ．産業廃棄物 4,610Kg（前年度比128.4%） 料金 159,734円（前年度比128.4%）
工芸館
観客の増加等により増加。
ア．一般廃棄物 4,830Kg（前年度比149.5%） 料金 101,430円（前年度比149.5%）
イ．産業廃棄物 980Kg（前年度比163.3%） 料金 33,954円（前年度比163.3%）
 - (3) その他 古紙の再利用、OA機器等のトナーカートリッジリサイクルによる再生使用
3. 施設の有効利用
講堂について、館の事業に差し支えない範囲で、外部への貸し付けを行った。
講堂等の利用率9%（32日/366日）
講演会 18日
美術館レクチャー 4日
講堂貸出 10日
4. 外部委託

平成15年度も下記の外部委託を行い業務の効率化を図った。今後も各業務の見直しを行い、外部委託の可能なものの検討を進めていく。

- | | |
|----------|------------------|
| 1 会場管理業務 | 6 収入金等集配業務 |
| 2 設備管理業務 | 7 レストラン運営業務 |
| 3 清掃業務 | 8 アートライブラリ運営業務 |
| 4 保安警備業務 | 9 ミュージアムショップ運営業務 |
| 5 機械警備業務 | |

5. O A化

館内LANの整備状況

館内LANは全館内に整備されており、各職員が1台ずつパソコンを使用できる環境にある。館内LANは文書ファイルの共有、Eメールによる事務連絡に活用しており、事務の効率化を図った。

紙の使用量 765,500枚（前年度比98.5%）

A 4 695,000枚

A 3 48,000枚

B 4 17,500枚

B 5 5,000枚

6. 一般競争入札

- | | |
|-------------|---|
| 1. 本館、工芸館 | 一般競争入札件数 4件（総契約件数 134件）
（看士・発券・出札等業務、設備管理業務、清掃業務、「旅」展会場設営工事） |
| 2. フィルムセンター | 一般競争入札件数 1件（総契約件数 52件） |

7. 評議員会

開催回数 1回（平成16年2月18日（水））

議事内容

平成15年度事業の実施状況、平成16年度事業計画、及び平成14年度事業の外部評価結果について報告。夜間開館日の増加等の入館者サービスの促進、評価のあり方等について意見交換。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

省エネルギーにかかる経費節約については、光熱水料で契約変更が可能なものについて契約の見直しを行った結果、電気・ガス・水道使用料について経費節減を行うことができた。

また、紙の使用量については両面印刷を活用する等節約を進めてきたことにより、昨年度と比較して98.5%に抑えることができた。

施設の有効利用については、講堂利用案内を作成し、全国の美術館・教育機関等に配布し、積極的に広報した（対外貸付実績 10件）。

さらに、独立行政法人特有の会計処理に関する研修、放送大学通信教育の簿記入門科目の受講、接遇研修等を通して、職員の資質の向上を図り、意識や取り組みの改善に努めた。

【見直し又は改善を要する点】

美術館では所蔵作品を多数保有しているため、保安上の観点から、会場管理業務、設備管理業務、清掃業務については、従来指名競争を行っていたが、平成15年度から一般競争入札の拡大を図るため、厳正な資格審査を行った上で、これらの業務について試験的に一般競争入札を行った。しかし、応募者が予想より少なかったことから、今後、資格審査にかかる条件の緩和等の見直しを検討していきたい。

また、施設の有効利用については、講堂使用料の料金区分（半日、一日使用時の料金の逓減化）を新たに設けて時間当たりの料金の低廉化を図る等の料金体系の見直しを行うとともに、利用案内パンフレットを作成して、広報活動を積極的に行った。結果として、貸付についての問い合わせ件数が増えた。ただし、予約は平成16年度における使用のためのものが多いため、平成15年度中の講堂利用率の増加に寄与しなかった。平成16年度も引き続き積極的に広報活動を行い、新規に顧客を開拓していきたい。

【計画を達成するために障害となっている点】

光熱水料は、入場者数や季節の寒暖に影響を受けるため、年間使用量を把握しにくい。

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成する

ためにとるべき措置

1. 収集・保管

(1) 美術作品の収集(購入・寄贈・寄託)の状況

中期計画

(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を図る。また、そのための情報収集を行う。

(東京国立近代美術館)

近・現代の絵画・水彩・素描、版画、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。

美術・工芸に関してはコレクションにより近代美術全般の歴史的な常設展が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。

また、映画フィルム等については、残存するフィルムを可能な限り収集するとともに積極的に復元を図る。

(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている分野を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。

実績

1. 購入	108件、	うち国宝	0件、	重要文化財	0件
2. 寄贈	95件、	うち国宝	0件、	重要文化財	0件
3. 寄託	306件、	うち国宝	0件、	重要文化財	0件
4. 陳列品購入経費	予算額	253,503,000円	決算額	249,261,060円	

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：開館以来、わが国の近代美術を系統的に展観できるコレクションの形成をめざして、継続的な収集に努めてきた結果、当館のコレクションは、全体としては大きな欠落の比較的少ないものとなりつつあるが、個々の作家・流派レベルでいえばなお一層の充実を期すべき部分も多く、それらの補填が収集活動の重要な課題の一つとなっている。

平成15年度の新収集作品の中で、川合玉堂の《小松内府》(1899)は玉堂の初期の代表作であると同時に、明治30年代の歴史画の隆盛を伝える典型例として、近代美術史の通史的展観を補完するものである。また、村上華岳の《秋溪図》(1935)は晩年の優品であり、既蔵の《日高川清姫図》(1919)などとあいまって華岳作品の体系的展観へ向けての着実な一歩となった。小牧源太郎については、これまでの所蔵品は戦後のものがほとんどであり、戦前期の作例の収集が長い間望まれていたが、平成15年度、シュルレアリスム的手法による秀作《願望 No.1》(1938)を購入することができた。ルーチョ・フォンターナは、その「空間主義」によってわが国の多くの美術家たちにも強い影響を与え続けている世界的な作家である。《空間概念 期待》(1961)は、このシリーズ中でもとりわけ完成度が高い。制作直後から日本国内に所蔵されてきたもので、優れた美術作品を海外に流出させないという観点からも、今回の購入は大きな成果といえる。すでに当館で油彩作品4点を収蔵している鬚光は、1941年頃墨による極めて細密かつ高質な素描を制作したが、残存する作例は5点のみであり、内3点は既に公立美術館の所蔵となっている。今回、残る2点《作品》(1941)《蛾》(1941頃)を購入する機会に恵まれ、この重要画家の更なる体系的展観が可能となった。昨年度の外部評価報告書で指摘された海外作品の収集が少ないことについては、昨年度、当館において個展を開催したヴォルフガング・ライブの《米の食事》(1998)やドイツの重要な彫刻家アブラハム・ダヴィッド・クリスティアンの《無題》といった海外の現代品を収集したことも成果であった。また、昨年度に当館で開催した「現代美術への視点 連続と侵犯」展に出品された高嶺格のビデオ・インスタレーション作品《God Bless America》(平成15年度ヴェニス・ビ

エンナーレ展に招待出品)及びロラン・フレクスナーのドローイング、平成15年度に開催した「旅」展に出品された大岩オスカル幸男の《ガーデニング(マンハッタン)》を購入した。その他、日高理恵子、丸山直文の絵画等、同時代美術の動向を示す作品の収集にも配慮した。

写真作品については、北代省三、大辻清司、山口勝弘による『アサヒグラフ』のコラムページのタイトルカットとして制作された《APN》(1953-54)、土田ヒロミの太陽賞受賞作品《自閉空間》(1970)、平成15年度当館で個展を開催した牛腸茂雄の《SELF AND OTHERS》(1977)ほかを購入した。また、ながらく所蔵がのぞまれていたウィリアム・クラインの50～60年代の作品5点を収蔵できた。

また、受贈による収集成果として、特に加山作品の16点の寄贈は、作家とのかかわりの中から、加山展を契機として寄贈されたものであり、日頃の地道な努力が活かされたものと考え。田淵安一、菅井汲の油彩画、エミコ・サワラギ・ギルバートの素描などがあげられる。また、寄託については、国吉康雄作品22点をはじめ、ルーチョ・フォンターナ、ピエロ・マンゾーニ、テリー・ウィンターズ、トーマス・ルフといった海外作家の重要作品を受託することができ、常設展の充実に寄与したと考える。

さらに、美術作品の取り扱いに関する研究員の指導としては、当館主任研究官がこれに当たったほか、新規採用の研究員は、東京文化財研究所保存科学部による「博物館・美術館等の保存担当学芸員研修」を履修した。

工芸館：工芸館の所蔵品は、もともと文化庁が購入した重要無形文化財保持者の作品、日本伝統工芸展の受賞作などからなっていたため、戦後の伝統的な傾向を示す作品に偏っていた。このため、近代工芸・デザインの主要な歴史を展示できるコレクションにすることが、今後の重要な課題である。その点で、平成15年度は、昭和初期の河井寛次郎や、日展の作家、永澤永信、栗木達介らの作品を購入し、コレクションの充実を図った。また、これまで手薄だった民芸系のガラス作家船木倭帆の作品をまとめて購入でき、新しいコレクションの軸を作った。デザインでは、ロシア・アヴァンギャルドの陶芸作品を購入したが、これは日本のみならず世界的にも美術館コレクションとしては大変珍しいソヴィエトのモダンデザイン作品であり、ユニークな常設展を行い得るものである。また昨年亡くなった重要無形文化財保持者で陶芸家である、松井康成による十八点の作品の寄贈を受けた。初期から晩年までの代表作が多く、コレクションの充実を図ることが出来た。

【計画を達成するために障害となっている点】

本館：収集については、作品が市場に出ることが必要となるため、必ずしも美術館が希望する作品を収集するには制約がある。また、海外の主要作品の多くは価格の高騰により、購入が不可能となっている。

なお、当館は平成15年度の新収集作品を含めて、すべての所蔵作品について、修理データ等を記載したカードを制作しているが、作品の状態や修理については作品の形式に準じた個別的な要因が多く、共通規格に基づくデータベース化の可能性については4館学芸課長で引き続き検討していきたい。

工芸館：20世紀の初め頃から制作され始めたモダンデザインの初期の頃の作例を収集し、歴史的展示の充実を図り

たいが、これらは海外のオークションに掛けられることが多く、価格が高いこともさることながら、海外市場の情報を得ることがまず第一で、その方策を検討したい。

*添付資料

収集した美術作品件数の推移(事業実績統計表 p.1)

寄託された美術作品件数の推移(事業実績統計表 p.2)

購入・寄贈美術作品一覧(事業実績統計表 p.17)

(2) 保管の状況

中期計画

(2)-1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く後世へ伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。

(2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。

実績

1. 温湿度

(1) 本館

展示会場

空調実施時間 24時間

温度 25.0 湿度 55% (夏期)

温度 21.5 湿度 53% (冬期)

*上記の数値は、入館者が入ったときの設定(目標)値である。

収蔵庫

空調実施時間 24時間

温度 20.0 湿度 55% (日本画等)

温度 20.0 湿度 53% (油彩画等)

(2) 工芸館

展示会場

空調実施時間 9:00~17:00

温度 22.0 湿度 50%

収蔵庫

空調実施時間 9:00~17:00

温度 22.0 湿度 50%

2. 照明

本館、工芸館共

すべての蛍光灯は紫外線防止3,000K(博物館美術館用)

無段階調光可能

高演色タイプ

展示室 蛍光灯間接照明、スポットライト(ハロゲン、着脱式)

展示ケース 蛍光灯ライン照明

3. 空気汚染

2か月に1回、建築物における衛生的環境の確保に関する法律に基づき空気環境測定を実施。

本館展示室では炭酸ガス排出のための排気ファンを24時間運転している。

フィルター等管理

・展示室 ロール・オ・マット、高性能

・外気取り入れ口 ロール・オ・マット、中性能、ケミカル

・収蔵庫 ロール・オ・マット、高性能、活性炭

4. 防災

(1) 本館

・機械警備による監視、及び中央監視室での監視。また、火災警報監視盤は事務室にも設置している。有事の際には館職員による自衛消防隊及び業務委託の警備員、看士が観覧者の誘導を行う。機械警備中の警報発報は警備会社を通し、警察、消防へ直ちに通報される。

・自動火災報知設備

煙感知器、煙式スポット型(イオン化式、光電式)

熱感知器 差動式分布型、定温式・差動式スポット型

ガス探知機 窒素ガス・液化炭酸ガス消化設備

- ・ 消火設備
 - 消火装置 窒素ガス・液化炭酸ガス消火設備（展示室、新収蔵庫）
ハロゲン化物消火設備（旧収蔵庫）
 - 消火器具 ABC型粉末消火器具
 - 消火栓
- ・ 東京国立近代美術館本館自衛消防訓練
平成15年11月12日（水）17：30～18：00
参加人数：約50名

（2） 工芸館

- ・ 機械警備による監視、及び事務室の監視。また、火災警報監視盤は事務室にも設置している。有事の際には館職員による自衛消防隊及び業務委託の警備員、看士が観覧者の誘導を行う。機械警備中の警報発報は警備会社を通し、警察、消防へ直ちに通報される。
- ・ 自動火災報知設備
 - 煙感知器 煙式スポット型（イオン化式、光電式）
 - 熱感知器 差動式分布型、定温式・差動式スポット型
- ・ 消火設備
 - 消火装置 ハロゲン化物消火設備（収蔵庫）
 - 消火器具 ABC型粉末消火器具
 - 消火栓
- ・ 東京国立近代美術館工芸館自衛消防訓練
平成16年3月17日（金）9：30～10：00
参加人数：約25名

5. 防犯

- ・ 警備 本館 有人警備（8：00～19：00、金曜日は21：00まで）
工芸館 有人警備（8：30～18：15）
本館、工芸館共に建物が無人となるときは機械警備を実施（24時間対応可能）。
- ・ 展示室内 開館時間中は常時展示室内に看士を配置、警備員による随時巡回
- ・ 展示ケース ガラスセンサーを設置、機械警備と連動（本館）
- ・ 館内各所に監視カメラを設置、警備員による監視。収蔵庫等は作業時を除き、常時機械警備を実施（本館）。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：平成15年度の新収集作品を含めて、すべての所蔵作品の記録カードを作成している。また、24時間空調の実施によって、展示会場、収蔵庫ともに適切な保存環境が整備されている。

工芸館：作品の状態をチェックし、修理が必要な作品について所蔵作品データベース上に結果を記載する作業を進めているが、平成15年度は、緊急性の高い漆工、染織、陶芸部門のチェックを終了した。

【見直し又は改善を要する点】

保存状況の記録カードの国立美術館4館での統一化については、各館それぞれが異なる視点をもって、多年にわた

り独自の形式による記録を続けてきており、系統の異なる各館所蔵作品を包括し得る記録形式の模索等の課題があり、実現は困難であるものの、平成15年度は学芸課長会議等で検討に着手したところである。今後とも検討していくこととしたい。

(3) 修理の状況

中期計画

(3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。

緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。

伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。

(3)-2 国内外の博物館等の修理、保存処理の充実に寄与する。

実 績

1. 修理件数

日本画	5件
洋画	3件
水彩・素描	5件
版画	31件
彫刻	0件
陶磁	0件
漆工・木工・竹工	2件
染織	3件
金工	0件

2. 修理経費 予算額 15,988,000円 決算額 17,863,545円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：毎年、修理を要する作品の洗い出しと実施を続けてきた結果、現在では、緊急の修理を要する作品はほとんど無いと言ってよい状況にある。しかし、明治・大正期の作品に関しては、大なり小なり作品の状態に問題があるものも多く、収蔵庫内での保管には支障が無いが、ギャラリーでの展示には多少問題のある作品や、館内での展示には支障が無いが、貸出（輸送）については危惧がある作品が多い。この点については、常設展や貸出の準備段階における作品の状態チェックが、所蔵作品の診断の機会となっており、平成15年度は、そうした展示・貸出目的のために早急な修復措置を必要とする作品の修理を行った（事業実績統計表参照）とりわけ、広本進の作品については、貸し出しの依頼に対応するため、修理業者と綿密な打ち合わせの上、輸送と展示に支障のないように修理を行った。

また、修理業者への指導については、抜本的な修理を行なうか、それとも部分的な修理を施して、その後の経過を継続的に観察していくかなど、処置の方法については修理業者と綿密な話し合いを行った上で委託し、修理報告書の提出を義務づけている。

工芸館：常に作品の現状について把握するよう努めており、状態に大きな問題のある作品はない。ただ、通常の展示や貸し出し作業中に付く汚れ程度の問題が生じている。また、工芸品特有の経年変化が生じ、痩せ（木材の合わせた部分が温湿度の変化でわずかにずれる）や糊の黄ばみ（充分落ちていなかった糊が染みになる）などが発生しているものがある。こうした作品は、これまで計画的に修理を進めてきた。その中で、平成15年度は漆工作品2点、染織作品3点の修理を行った。漆工作品は新村撰吉《漆皮盤》、松田権六《蒔絵鷺文飾箱》で、いずれも館内での展示および借用希望を多く受ける作品であり、高い技術を要するこれらの保存修理や擦り傷の修復を行えたことは、有意義であった。また、染織作品については、ケース外展示中に、どうしても埃等が付着して色彩がくすんだ印象になっていた久保田繁雄《Wave Space II》のクリーニングと、繰り返しの展示作

業によりゆがみの生じていたフレームの交換、および伊砂利彦の着物作品2点の表現様式に適した仕立て直しを行ったが、これらは作品保全だけでなく、作品鑑賞という見地においても効果的な対応であった。

【見直し又は改善を要する点】

本館：全体として深刻な問題は少ないが、全ての作品について経年変化による劣化、汚れは観察される。今後も最適な

保存環境を維持すると同時に、経年変化に対する細やかな手入れと状況に応じた対策を講じていきたい。

工芸館：工芸作品は、温湿度や紫外線、また展示中に付着する埃等の影響を受けやすい。そのような性質に留意した

上で、公衆の観覧や研究活動に使用するために、従来行ってきた常設展や貸出の準備段階における作品の状態チ

ェックを継続し、作品管理システムに反映させていくことが有効である。また、木作品の痩せなどの経年変化等に

対しては、長期的な修理計画を立てていく必要もあると考える。

【計画を達成するために障害となっている点】

保存修復の専門職員を擁しないため、この方面についての他館への協力・寄与については、専門家の紹介程度しかできない。

***添付資料**

修理した美術作品の点数（事業実績統計表 p.3）

修理した美術作品一覧（事業実績統計表 p.90）

2. 公衆への観覧

(1) 展覧会の状況

中期計画

(1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。

(1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。

(1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。なお、実施にあたっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。

(東京国立近代美術館)

本館 年3～5回程度

工芸館 年2～3回程度

(1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。

(1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。

(1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公私立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。

なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。

また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。

(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。

(3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。

実績(総括表)

1. 常設展

(1) 本館

展示替 5回(屏風及び軸装の日本画等については、原則的に各会期間に展示替えを行った。)

(2) 工芸館

展示替 3回

2. 特別展・共催展 11回

(1) 本館(中期計画記載回数:年3～5回)

「青木繁と近代日本のロマンティズム」展

「牛腸茂雄」展

「地平線の夢 - 昭和10年代の幻想絵画」

「野見山暁治」展

「旅 - 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」

「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」展

「国吉康雄」展

* 「青木繁と近代日本のロマンティズム」展の会期は平成15年3月25日から

* 「国吉康雄」展の会期は平成16年5月16日まで

(2) 工芸館(中期計画記載回数:年2～3回)

「今日の人形芸術 - 想念の造形」展

「オーストラリア現代工芸3人展：未知のかたちを求めて」

「三代藍堂 宮田宏平展 - 金属工芸の先駆け」

「現代の木工家具」展

「あかり：イサム・ノグチが作った光の彫刻」

* 「今日の人形芸術 - 想念の造形」展の会期は平成15年3月28日から

3. 入館者数 415,091人 (目標入場者数 310,000人)

(1) 本館

常設展

152,415人 (目標入場者数 97,000人 平成14年度入場者数 134,317人 対平成14年度比 113.56%)

企画展

148,542人 (目標入場者数 157,000人 平成14年度入場者数 269,731人 対平成14年度比 55.07%)

(2) 工芸館

常設展

35,026人 (目標入場者数 22,000人 平成14年度入場者数 21,435人 対平成14年度比 163.40%)

企画展

79,018人 (目標入場者数 34,000人 平成14年度入場者数 36,655人 対平成14年度比 215.82%)

目標入場者数の設定にあたっては、基本的に当館で行われた同種の展覧会の入館者数のほか、他館での展覧会データもあればそれも参考にしている。その上で、歴史的な評価の変動や世代による価値観の多様化といった時間の経過からくる変化、同種展覧会の開催頻度、知名度、単独主催か共催かといった運営形態、展覧会にかかった労力や経費、開催の時期(シーズン)といった問題を加味して、最終的な目標入場者数を試算している。

4. 海外交流展 0回

5. 地方巡回展 0回(平成12年度実績: 0回 0人)

6. 国立美術館巡回展(平成12年度実績: 4回 23,918人)

1回 5,588人

7. 展覧会開催経費 予算額 328,725,000円 決算額 290,188,276円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：当館は、近代日本美術の流れをその代表作によって通覧しうるコレクションを有するため、常設展においては一定程度の恒常性が要求される一方、来館者心理として変化を期待する声もある。そのため、時代に沿った編年的展示の随所に特集展示を織り込む形式をとっているが、平成15年度は、全階(4~2階)に常に特集展示の一角を設けられるよう、通年プログラムを立てて実施した。常設展観覧者が増加した一因は、そこにあると考えられる。

「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」展のようなテーマ展や、「ヨハネス・イッテン 造形芸術への道」展のようなわが国で初めての個展 つまり作家の知名度等による観客動員力を必ずしも期待できない展覧会の場合、講演会やギャラリートーク等を始めとする関連事業や、広報活動との連携が重要であるが、後述するように(「4-(1)講演会等の事業」「4-(6)広報活動の状況」を参照)、この点については新規の取組みも多く、また、新聞・雑誌等の反響(「展覧会関連新聞・雑誌記事等」参照)を見ても、

所期の成果を収めたと考える。

工芸館：昨年度において総入館者数の目標値は達成されたものの、常設展において目標を約500人下回ったことを反省し、各展覧会と連携した教育普及活動の根本的見直しを行なった。具体的には、従来の工芸関係雑誌とのタイアップなどに加えて、展示の内容ごとに、これまでに送付したことのない場所へポスター等を送付するなど、効果的な広報を工夫したこと、美術・教育系大学や中高の美術系教官や工芸研究団体に、教育・研究の一環として所蔵作品の特別観覧（熟覧）やギャラリートークを実施し広報につなげたことなど、特に広報面での努力があげられる。また、夏休みの子どもプログラムの充実、ギャラリートークの回数をほぼ倍増させるなどの努力により、約2.6倍の入館者増となった。

【見直し又は改善を要する点】

本館：常設展における会場の案内や解説については、平成15年度に実施した新しい試みも多い（具体的には「常設展」の自己点検評価を参照）が、展示場が3階層にわたり、出品点数が200点を越えること等を考えると、ビデオ等視聴覚機器を用いた解説の充実など、今後改善すべき点がある。

「青木繁と近代日本のロマンティズム」展については、これまでに開催された青木繁展等の実績を基に目標入場者数を算定したが、所期の目標に達しなかった。青木繁に限らず、作家に関する従来の認知度や知名度そのものに変動が生じているケースも多々あると推測され、今後は注意を要すると考える。

工芸館：一定の入館者数増という結果を得たが、これを一時的なものにすることなく、定着させていくことが重要である。そのためには、各展示毎のきめの細かい広報関係名簿の整理及び拡充を行うことが必要である。それと同時に、工芸館の認知度を大幅に上げるためには、大規模な広報活動が必要であり、工芸館建物周辺の広報環境の整備、展覧会ごとの性格を十分考慮した広告費を使った効果的広報等、広報活動の規模拡大のための方策をとることが必要であると考え。さらに小・中・高校のうち、特に中学校の工芸関係授業とのタイアップ等、児童生徒を対象とした事業と広報活動の連携の方途を探すことも重要である。

*添付資料

入館者数の推移（事業実績統計表 p.4）

入場料収入の推移（事業実績統計表 p.7）

本館

「常設展」

方 針

当館の常設展は、近代日本美術の歴史的展開を系統的に展観することを主要な目的としているが、それは、同じ作品が常に定位置に展示されているという意味での「常設」展示を意味するものではない。増改築によって常設展場は約3,000㎡に拡張されたが、一時に展示できる作品数は200～250点（おおむね1作家1作品）程度であり、したがって各階ごとの時代区分などの大枠は一定に保ちつつ、会期ごとに展示作品のかなりの部分（日本画・版画・写真はすべて）を入れ替えながら、各作家および時代の多面的な相貌を幅広く鑑賞できるように努めた。また、会期ごとにテーマを立てた小特集を行い、歴史をたどるだけでなく、新たな角度から作品に光を当てる工夫も試みた。

実 績

1. 開会期間

常設展「近代日本の美術」平成15年3月14日～平成15年5月11日（52日間/うち平成15年度37日間） 4月28日（月）開館

常設展「近代日本の美術」平成15年5月16日～平成15年7月21日（58日間）

常設展「近代日本の美術」平成15年7月29日～平成15年10月5日（60日間）

常設展「近代日本の美術」平成15年10月11日～平成16年1月4日（71日間/12月29日～1月1日休館）

常設展「近代日本の美術」平成16年1月9日～平成16年2月29日（45日間）

常設展「近代日本の美術」平成16年3月5日～平成16年5月16日（66日間/うち平成15年度24日間） 3月29日（月） 4月5日（月）開館

15年度 計295日間

（所蔵作品展のみの開催期間69日間）

2. 会 場 本 館 2階～4階

3. 出品点数

228件（うち重要文化財 2件）

217件（うち重要文化財 2件）

232件（うち重要文化財 3件）

200件（うち重要文化財 4件）

243件（うち重要文化財 3件）

269件（うち重要文化財 3件）

延 1389件（うち重要文化財 17件）

4. 入館者数

152,415人（常設展目標入場者数 97,000人）

5. 入場料金

一般420円 大学生130円 高校生70円 一般(団体)210円 大学生(団体)70円 高校生(団体)40円

6. 入場料収入（常設展のみの入場料収入 8,784,480円

（目標入場料収入 10,079,000円）

7. アンケート調査

第1回 調査期間 平成15年4月24日～平成15年4月27日（4日間）

調査方法 来館者に手渡し、記述式（午前・午後各1時間）

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 151件（母集団48,264人） 15年度43,001人

- アンケート結果 ・良い85.5% (129件)・普通13.2% (20件)・悪い11.3% (2件)
- 第2回 調査期間 平成15年7月3日～平成15年7月6日(4日間)
調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)
金曜日の夜間開館中にも1時間行った。
アンケート回収数 145件(母集団19,780人)
アンケート結果 ・良い67.6% (98件)・普通28.3% (41件)・悪い4.1% (6件)
- 第3回 調査期間 平成15年10月3日～平成15年10月5日(3日間)
調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)
金曜日の夜間開館中にも1時間行った。
アンケート回収数 190件(母集団32,326人)
アンケート結果 ・良い71.5% (98件)・普通23.2% (44件)・悪い5.3% (10件)
- 第4回 調査期間 平成15年11月21日～平成15年11月24日(4日間)
調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)
金曜日の夜間開館中にも1時間行った。
アンケート回収数 250件(母集団35,291人)
アンケート結果 ・良い68.4% (171件)・普通30.0% (75件)・悪い1.6% (4件)
- 第5回 調査期間 平成16年1月29日～平成16年2月1日(4日間)
調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)
金曜日の夜間開館中にも1時間行った。
アンケート回収数 194件(母集団14,920人)
アンケート結果 ・良い71.7% (139件)・普通27.3% (53件)・悪い1.0% (2件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

- ・近代日本美術の流れを200点以上の規模で常時概観することのできる美術館は、他にはない。来館者アンケートでも「美術史上の名品をたくさん見ることができてよい」「教科書などで見た名作を実際に見られてよかった」「年代別の展示でわかりやすい」という肯定的な意見が多数を占めた。また、展示替えを毎回楽しみにしているという意見もみられ、リニューアル以降の常設展のリフレッシュが、次第に来館者に浸透していることが窺えた。
- ・来館者数においても、昨年度に比べて約2万人増加した。
- ・時代順の展示の他に、昨年度に引き続き、展示室の一部を用いた特集展示を行った。その内容は次のとおり。
 - 4階：自画像/3階：版画：うつろう時と風景 - 大正期の版画/3階：写真：光の造形 2 光と影の表現/2階ギャラリー4：彫刻 - 内部と外部
 - 4階：長谷川利行/3階：版画：大正・昭和戦前期の水彩/3階：写真：写真の中の人間像 1 肖像 - 自己と他者
 - 4階：梅原龍三郎/3階：版画：駒井哲郎/3階：写真：写真の中の人間像 2 身体をめぐる表現/2階ギャラリー4：美術と音楽
 - 4階：藤田嗣治/3階：版画：織田一磨/3階：写真：写真の中の人間像 3 群衆
 - 4階：静かなる宴 - 近代日本の静物画/3階：版画：マックス・ペヒシュタイン/3階：写真：植田正治/2階ギャラリー4：版の世界 - その多様な展開
 - 4階：戸張孤雁/3階：版画+写真：恩地孝四郎/2階ギャラリー4：彫刻家の眼と手 - 素描と彫刻
- 通常の時代順の展示では各作家約1点ずつしか展示できないが、これらの特集展示では一人の作家についてまとまった数の展示を行い、作風の展開を示すことが可能なため、来館者アンケートでも肯定的な反応を得た。特に、夏休みの時期に2階ギャラリー4で開催した特集展示「美術と音楽」では、コレクションの展示に加えて関連した音楽をCDで聴けるような展示を行い、好評を博した。
- ・会期ごとに展示中の作品リストをホームページに掲載した。またそのハイライトを文章、会場写真で紹介して、

コレクション展示の豊富さと年間を通した変化をアピールした。

- ・初めての試みとして、平成15年度の初めに、主要作品の展示予定や特集展示について記した所蔵作品展のチラシを作成し、美術館等の他に都内の公共図書館や文化会館等にも配布して、企画展とあわせて広報に努めた。
- ・フロアプラン（会場ガイド）は、これまで和文・英文のみであったが、平成15年12月に東芝国際交流財団の助成を受けてフランス語版、ドイツ語版、中国語版、韓国語版を作成した。
- ・展示作品に関して、作品データを記したキャプションの他に、必要に応じて画題解説を付した。また、解説文の文字が小さくて読みにくいという指摘を踏まえ、書体と大きさに配慮して作成した。
- ・来館者からのアンケート結果に、「作品解説がほしい」「現代美術がわかりにくい」という意見が目立った。これらの声を受けて、平成16年2月より、持ち歩くことの可能な、主要作品の解説シートを試験的に4階（戦前の美術に関する展示）会場に設置したところ、「わかりやすい」「短時間で読めてひきつけられた」等の好意的なアンケート結果を得た。平成16年度は同カードを本格的に導入し、観覧者の鑑賞の一助としたい。

【見直し又は改善を要する点】

- ・毎回、展示場の一角で行う特集展示については、企画展と比べて広報手段が限られており、より計画的な広報戦略が必要である。平成16年度は早期に年間予定をたて、イベントカレンダーその他の媒体を用いた広報を行えるようにしたい。
- ・会場内の英語表記を、より拡充していく必要がある。展示の概要は英語版フロアプラン（会場ガイド）に記載しているが、現状では会場の解説パネルは和文のみであり、和英併記が望ましい。その他の館内の各種掲示についても、英語表記の必要なものを再検討したい。さらに、英語版のギャラリーガイド（ガイドブック）を作成し、海外からの来館者にアピールしていくこととする。
- ・ホームページにおける常設展の紹介に関しては、よりわかりやすくアピール度の高いものにするよう工夫改善を重ねていく必要がある。現在は時代順に簡単な章解説と主要作品を記しているが、それに加えて、今後は特に目玉となる作品についてはその魅力をくわしく解説するなど、内容面に変化をもたせていきたい。また、昨年度に引き続き、データベース検索システムにおいて著作権の切れた作品の画像を公開表示するよう努める。
- ・1階で開催する企画展を目的に来館した観客に、常設展もあわせて観覧してもらえるようなアピールについて、より一層の工夫が必要である。企画展に関連する作品が常設展に展示してある場合、会場に掲示するなどのこれまでの工夫に加え、エントランスロビーに常設展に関する情報（主要作品や特集など）を掲示するなど、館内広報をより一層積極的に試みる必要がある。

「青木繁と近代日本のロマンティズム」展（共催展）

方 針

この展覧会は、20年ぶりの青木繁回顧展として構成されたもので、青木繁の主要作品を網羅することを目指した。それに加えて、青木の精神的後継者とも言うべき作家、中村彝、村上華岳、村山槐多、関根正二ら19人の作品をあわせて展示し、青木に始まるもうひとつの日本近代美術史を示すことを試みた。特にこの19人と青木のつながりを考える際には、直接的な交友や師弟関係といった美術史上の結びつきにとらわれず、描かれたモチーフや表現方法など、作品自体の中に共通項を探ることを重視した。

実 績

1. 開会期間 平成15年3月25日～平成15年5月11日
(平成15年4月1日～平成15年5月11日) 15年度
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 共 催 日本経済新聞社、石橋財団石橋美術館
協 賛 三井不動産、東レ
4. 出品点数 145件(うち国宝 0件、重要文化財 8件)
5. 入館者数 56,713人(目標 69,000人)
(52,713人(目標 61,000人))
6. 入場料金 個人：一般 1,200円 学生 900円
団体：一般 800円 学生 600円
前売：一般 1,000円 学生 800円
割引：一般 1,100円 学生 850円
7. 入場料収入 8,542,490円(目標入場料収入 14,192,000円)
8. 担当した研究員数 3人
9. 展覧会の内容
20年ぶりの青木繁回顧展として、重要文化財《海の幸》《わだつみのいるこの宮》を含む青木の作品77点を展示。加えて、その精神を受け継ぐ作家たち、中村彝、村上華岳、村山槐多、関根正二ら19人の作品68点を併せて展覧し、多様な視点から近代日本美術史における青木繁の位置付けを探った。全体を「神話的渾沌から」「海のフォークロア」「生命礼賛」「恋愛あるいは永遠の女性」「古代の発見」「望郷あるいは晩年」の6章で構成した。
10. 講演会等 3回 参加人数 373人
11. 広報
共催者の日本経済新聞社の協力で、外部に広報事務所を設け、プレスリリースの作成・発送、記者内見会および記者発表の開催、各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、鉄道駅(JR、営団地下鉄)へのポスターの提出、車内吊広告・電飾看板の掲示、チラシ配布、その他雑誌・新聞・テレビ取材への対応などを行った。
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
現代の眼(東京国立近代美術館) 第538号(2003年1-3月) 「青木繁の『九州放浪』遺聞」(田中淳)
現代の眼(東京国立近代美術館) 第538号(2003年1-3月) 「夏目漱石に愛された青木繁」(新関公子)
朝日新聞 2003年4月7日 「近代日本の美術2展」(高階秀爾)
新美術新聞 2003年4月11日 「青木繁と近代日本のロマンティズム」(蔵屋美香)
日本経済新聞 2003年4月13日 「眼差しの悲しみ-青木繁」(竹田博志)
和楽 2003年4月 「青木繁にはじまる創造の水脈」(蔵屋美香)
信濃日報 2003年6月4日、6日 「女の顔 『青木繁と近代日本のロマンティズム』展を観て」1、2(片桐

晴夫)

美術手帖 第 835 号 (2003 年 6 月号) 「青木繁と近代日本のロマンティズム 感情の構造」(北澤憲昭)
暮らしの手帖 335 号 (2003 年 6 月号) 「ちいささの役割」(池内紀)

13. アンケート調査

調査期間 平成 15 年 4 月 10 日～平成 15 年 4 月 13 日 (4 日間)

調査方法 来館者に手渡し、記述式 (午前・午後各 1 時間)

金曜日の夜間開館中にも 1 時間行った。

アンケート回収数 249 件 (母集団 56,713 人) 15 年度 52,713 人

アンケート結果 ・良い 85.2% (212 件)・普通 14.0% (35 件)・悪い 10.8% (2 件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

この展覧会のために、久留米の石橋美術館と 3 年間にわたって共同研究を行うことができたことは大きな成果であった。本展によって、従来の様式史的なものの見方にとらわれず、社会や文化全体の動きにも目配りをしながら、青木繁を通じて、近代日本の文化の底に一貫して流れるものを掘り起こし得たのは、青木繁の代表作を数多く所蔵し、長年にわたって研究を蓄積してきた石橋美術館と、近代美術については最も豊富な資料を所蔵する当館が協力して取り組むことができたからである。近代美術史研究のあり方に一石を投じたものとして、新聞批評等でも高い評価を得ており、当初の目的は十分に達成されたと考えている。

なお、開催期間中の休館日である 4 月 28 日 (月) を臨時に開館し、ゴールデンウィーク中の入館者サービスの向上に努めた。

【見直し又は改善を要する点】

予想した入館者数を大幅に下回った原因としては、春期の展覧会シーズンに開かれたため、他館の有力な展覧会のいくつかと競合したこと、また広報活動が立ち遅れたことなどが考えられる。これに加え、本展覧会は、一人の作家の個展であると同時に、他の作家の作品をも併せて展示し、幅広く日本近代美術を見渡すことを目指したため、観覧者に、焦点が絞りにくいとの印象を与えた可能性は否めない。宣伝物としては説明文を前面に出したチラシを用意し、会場ではパネルの章解説や作品解説、フロアプランの無料配布、音声ガイドの提供などさまざまな試みを行ったが、展覧会意図の伝達という点では、いまだ検討・工夫の余地が残る。今後は個々の展覧会の性格を踏まえ、たうえて、広報および展示について、たとえば若者、女性、中高年など、客層ごとにターゲットを絞ったデザインや展示方法を一層工夫する必要がある。

また、アンケートの中で、会場の作品解説パネルの文字が小さいとの苦情を若干受けた。これについては、次の「牛腸茂雄」、「地平線の夢」以降文字の大きさや行間のあけ方について、さっそく改善を行った。アンケートにおいては、他にも、照明の関係で画面が光って見にくかった、イヤホンガイドの内容と会場に掲出された作品解説パネルの内容が重複して物足りなかった、等の意見が出た。前者についてはより一層見やすい照明の工夫を心がけ、また後者については、今後、パネルとイヤホンガイドで取り上げる作品を変える、解説内容に変化を持たせる、等の改善を行いたい。

「牛腸茂雄」展（特集展示）

方 針

写真家牛腸茂雄(1946-1983)の回顧展。60年代末の「コンポラ写真」の代表的な存在として語られることの多い牛腸の仕事を、代表作となった SELF AND OTHERS（自己と他者）（1977）を中心に、彼が残した3冊の写真集およびインクプロット作品等によって回顧し、日常的な光景に淡々とした視線を向けた「コンポラ写真」という現象について再考するとともに、そうした時代の潮流の枠を越えた牛腸の作品世界の深みと魅力を紹介することを目指した。

実 績

1. 開会期間 平成15年5月24日～平成15年7月21日
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 ギャラリー4
3. 主 催 東京国立近代美術館
4. 出品点数 87件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）
5. 入館者数 15,082人（目標 11,000人）
6. 入場料金 個人：一般 420円 大学生 130円 高校生 70円
団体：一般 210円 大学生 70円 高校生 40円
7. 入場料収入は、常設展入場料収入に含まれる。
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容
写真家牛腸茂雄の遺した3冊の写真集に収録された作品を中心に、牛腸の仕事を回顧した。日々（18点）、SELF AND OTHERS（60点）の二つのシリーズについてはオリジナル・プリントを展示。見慣れた街の中で（47画像）については液晶プロジェクターによる画像投映により紹介した。またインクプロット作品 扉をあけると（4点）、マーブリング作品 水の記憶（4点）を併せて展示した。
10. 講演会等 ギャラリートーク 2回 157人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）
11. 広報
プレスリリースの作成・発送、記者内見会および記者発表の実施、各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、鉄道駅（京王線、JR、営団地下鉄）へのポスター掲出、ホームページ上での展覧会紹介、その他雑誌・新聞・テレビ（NHK「新日曜美術館」など）による取材への対応などを行った。
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
現代の眼（東京国立近代美術館） 第539号（2003年4-5月） 「牛腸茂雄の眼差しに潜むもの」（佐藤真）
現代の眼（東京国立近代美術館） 第539号（2003年4-5月） 「写真のスタンダード 『牛腸茂雄』という
記憶（柳本尚規）
日本カメラ 2003年6月号 「再評価の理由」（鳥原学）
新潟日報 2003年6月6日 「何げないショットに余韻 牛腸茂雄（加茂出身）の作品展」（藤島俊会）
毎日新聞 2003年6月11日 「写真家・故牛腸茂雄さんの草稿や手紙などコラージュ 作品を見つめ直す映画上映」（高尾具成）
pen No.108 2003年6月15日 「写真からあふれ出る、儂くも脆い存在への共感。」（飯沢耕太郎）
朝日新聞夕刊 2003年7月8日 「『見つめられている』私たち」（大西若人）
ブレーン 2003年8月号 「『自己と他者との出会い』を追求した写真」（上原裕子）
ミュージック・マガジン 2003年8月号 「一見やさしげな写真の奥にある痛烈なまなざし」（鳥原学）
13. アンケート調査
調査期間 平成15年6月19日～平成15年6月22日（4日間）

調査方法 来館者に手渡し、記述式（午前・午後各1時間）
金曜日の夜間開館中にも1時間行った。
アンケート回収 163件（母集団15,082人）
アンケート結果 ・良い68.7%（112件）・普通27.0%（44件）・悪い4.3%（7件）

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

近年その作品と生涯をテーマとする映画が製作されるなど、没後20年を経ても静かな関心を集め続ける牛腸茂雄だが、これまでその仕事がまとまって紹介されたことはなかった。今回の展覧会は彼が出版した3冊の写真集の作品を中心とした、比較的小規模なものであるとはいえ、初めての本格的な回顧展として、牛腸への関心の高まりに応える意味でも良い機会となった。二度開催したギャラリートークにはそれぞれ約80人の参加者があるなど、牛腸に対する関心の高さがうかがわれた一方、所蔵作品ギャラリーの一角「ギャラリー4」を用いた特集展示という形式での最初の写真展として、牛腸展が目的ではない観覧者からの観覧者も得て、目標をかなり上回る入館者数となった。

【見直し又は改善を要する点】

比較的寡作であった上、夭折した牛腸茂雄ではあるが、その仕事を回顧するには、ギャラリー4という会場はやはり手狭であり、今回も一つのシリーズを映写形式で紹介するなど、展示内容は絞り込んだものとなった。来館者アンケートにも、点数の少なさを不満な点として指摘する意見があり、今後、ギャラリー4において写真家の個展を継続的に開催していく上で構成や展示方法には工夫が必要と考える。

「地平線の夢 - 昭和10年代の幻想絵画」(企画展)

方 針

本展は、わが国の近代美術史における昭和10年代という一時代に焦点を当て、これまで見過ごされがちであった作家・作品に、従来とは別の角度から光を当て、再評価しようとしたものである。具体的には、これまで大戦間の時代にヨーロッパで起こったシュルレアリスムの受容・模倣と位置づけられてきた一群の絵画作品に現われる「地平線」に着目し、それを、閉塞した時代状況の中で理想を求める画家たちの「彼方への憧憬」を象徴するものと解釈することによって、そうした表現を広義の浪漫主義的な作品として読み直す可能性を提起した。あわせて、それらの画家たちが求めていたもの、克服しようとしていたものが何であるかを、同様の閉塞感の漂う現代において再考し、その現代性を問い直すことを提案することを目指した。

実 績

1. 開会期間 平成15年6月3日~平成15年7月21日
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 主 催 東京国立近代美術館
4. 出品点数 79件(うち国宝 0件、重要文化財 0件)
5. 入館者数 10,621人(目標 19,000人)
6. 入場料金 個人: 一般 630円 大学生 340円 高校生 250円
団体: 一般 510円 大学生 250円 高校生 140円
前売: 一般 530円 大学生 250円 高校生 140円
7. 入場料収入 4,515,830円(目標入場料収入 6,091,000円)
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容
わが国で昭和10年代にさかんに描かれた幻想絵画は、これまでシュルレアリスムの模倣と見なされてきたが、本展は、そうした幻想絵画の再評価の糸口として地平線の表現に着目し、26人の洋画家による79点の作品を一堂に集めて展示した。
10. 講演会等 講演会: 1回 63人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
ギャラリートーク: 1回 41人
11. 広 報
プレスリリースの作成・発送、記者内見会および記者発表の開催、各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、鉄道駅(京王線、JR、営団地下鉄)へのポスターの提出、ホームページ上での展覧会紹介、その他雑誌・新聞・放送局(NHK「新日曜美術館」など)等による取材への対応などを行った。
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
現代の眼(東京国立近代美術館) 第538号(2003年2-3月) 「地平線の夢 昭和10年代の幻想絵画」(大谷省吾)
現代の眼(東京国立近代美術館) 第540号(2003年6-7月) 「昭和10年代の古代憧憬」(小林俊介)
現代の眼(東京国立近代美術館) 第540号(2003年6-7月) 「昭和戦前期の浪漫主義的絵画について」(土方明司)
信濃毎日新聞(夕刊) 2003年6月10日 「今日の視覚 矢崎博信の絵」(藤森照信)
Financial Times 2003年6月16日 "THE CRITICS. Japanese surrealists" (Linda Inoki)
長野日報 2003年6月23日 「『高原の幻想』を見て考えたこと 東京国立近代美術館の『地平線の夢』展にふれて」(石川翠)

朝日新聞(夕刊) 2003年6月26日 「『地平線の夢 - 昭和10年代の幻想絵画』展 「浪漫」で読み直す絵画史」(北澤憲昭)

産経新聞 2003年6月28日 「東京国立近代美術館『地平線の夢 昭和10年代の幻想絵画』若い芸術家たちの心象風景 “名品主義”脱却し新たな扉」(生田誠)

読売新聞(夕刊) 2003年7月5日 「芥川記者の展覧会へ行こう 地平線のかなたに理想」(芥川喜好)

東京新聞 2003年7月5日 「渾然となった希望と抑鬱感を表現 地平線の夢 - 昭和十年代の幻想絵画」(中村隆夫)

山形新聞 2003年7月14日 「米沢市出身・浜田浜雄の作品 さばけた客観的なまなざし 国立近代美術館『地平線の夢 昭和十年代の幻想絵画』展から」(石川翠)

芸術公論 2003年7月号 「展覧会 HIGH LIGHT」(無署名)

読売新聞(夕刊) 2003年7月15日 「『地平線の夢』展 今ここでないどこか 昭和十年代の幻想」(前田恭二)

京都新聞 2003年7月26日 「作品本位の展覧会 『地平線の夢』を見て」(小林昌廣)

芸術新潮 2003年9月号 「極東のさびしいダリたち (STARDUST : REVIEW of EXHIBITIONS)」(無署名)

群像 2003年10月号 「時代の『病芯』・負の強度 (Review Art)」(谷川渥)

毎日新聞(夕刊) 2003年12月10日 「印象に残った五つの出来事 (美術この1年)」(本江邦夫)

朝日新聞(夕刊) 2003年12月11日 「私の3点(回顧2003 美術)」(北澤憲昭)

13. アンケート調査

調査期間 平成15年6月5日～平成15年6月8日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 152件(母集団10,621人)

アンケート結果 ・良い66.4%(101件)・普通27.0%(41件)・悪い6.6%(10件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本展では学術的な専門性と、一般の観覧者へのメッセージ性とをいかに両立させるかについて苦心した。近代美術史の読み直しという課題と共に、展覧会で扱った昭和10年代という時代の閉塞性が、現代にも通じる要素を持っていると考えたためである。カタログは資料的価値の高い出版物とする一方で、会場では個々の作品を「読み解く」ための平易な解説を付した。このため多くの新聞の展覧会評等で高い評価を得、年末に特集される1年間の回顧においても、朝日新聞と毎日新聞紙上で特記された。観覧者のアンケートでも、「戦時下の日本美術はあまり知られていないので、新しい発見があった」など、好意的な感想を多数得た。

【悪かった点、改善を要する点】

本展は、近代美術史を読み直し、埋もれた画家を再評価しようというねらいを強く持つものであるため、取り上げた画家たちの中には、一般には知名度の低い画家が多数含まれている。したがって、広報には一工夫を要するところであるが、結果的に、一般向けの美術雑誌や情報誌に事前に大きく取り上げられることがほとんどなかった。また、ポスター等に関しても、同時期に当館で開催された「牛腸茂雄」展や、次回展である「野見山暁治」展の広報と相殺しあって、所期の効果を挙げられず、結果として、目標とした入館者数を大幅に下回ることとなった。本展のように、必ずしも有名作家や有名作品を取り上げるのではない、コンセプトを重視する展覧会の場合、主要な媒体に早い時期から働きかけ、コンセプトの意義を理解してもらい、特集などの紙面協力を促すといった、広報に関する特別の戦略が必要と考える。

「野見山暁治」展（共催展）

方 針

現代日本を代表する画家の一人、野見山暁治の回顧展である。野見山については、これまでに2度の大規模な回顧展（1983年北九州市立美術館、1996年練馬区立美術館）が開かれているが、本展は、戦前の初期から70年代までの画業を精選した代表作でたどるとともに、とりわけ1980年代以降の近作に重点を置いた構成とした。野見山の絵画は、常に身近な自然やモノから出発しながら、制作過程においてその姿を融通自在に変容させ、モノの存在の精髓や気配を抽出して画布にとどめるところに魅力がある。制作プロセスにおけるそうした変容が著しい1980年代以降の近作に主眼を置きつつ、併せて同時期のデッサン類をも展示することにより、制作過程と密接に関連した野見山の絵画の特質を探ろうとした。

実 績

1. 開会期間 平成15年8月12日～平成15年10月5日
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 共 催 日本経済新聞社
4. 出品点数 85件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）
5. 入館者数 30,884人（目標 24,000人）
6. 入場料金 個人：一般 1,200円 大学生 900円 高校生 500円
団体：一般 800円 大学生 600円 高校生 350円
前売：一般 1,000円 大学生 800円 高校生 400円
割引：一般 1,100円 大学生 850円 高校生 450円
7. 入場料収入 5,746,470円（目標入場料収入 4,936,000円）
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容
油彩65点、素描20点。その内、油彩画については、戦前の初期作から渡欧まで（第1章）、滞欧時代から1980年まで（第2章）、1981年以降の近作（第3章）の3つの章で構成した。
10. 講演会等 3回（追加講演会を含む） 490人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）
11. 広 報
プレスリリースの作成・発送、記者内見会および記者発表の開催、各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、鉄道駅（JR、営団地下鉄）へのポスターの提出、車額の掲示（営団地下鉄）、ホームページ上での展覧会紹介、その他雑誌・新聞・テレビ（NHK「新日曜美術館」など）等による取材への対応を行った。
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
現代の眼（東京国立近代美術館） 第540号（2003年6-7月） 展覧会紹介「野見山暁治展」（都築千重子）
日本経済新聞 2003年6月1日 「洋画家野見山暁治の手 自然に、奔放に動く 妻の死映す？ 最新作（創作探訪）」（浜部貴司）
現代の眼（東京国立近代美術館） 第541号（2003年8-9月） 「覚書き 野見山暁治展に寄せて」（牧野研一郎） / 「ある日の先生」（上葛明広）
月刊ギャラリー 第220号（2003年8月1日） インタビュー「時代を見つめた画家の眼差し（新・作家への道標103）」（野見山暁治）
美術の窓 第22巻第9号（2003年8月20日） 編集長対談（聞き手 一井建二）「うつろうかたち」（野見山暁治）
新美術新聞 No.1000（2003年8月21日 第1部） 「野見山さんの絵のこと（野見山暁治展 うつろうかたち）」（窪島誠一郎）
日本経済新聞 2003年8月25日 「シャワーの女（自作三選 うつろうかたち 上）」（野見山暁治）

日本経済新聞 2003年8月26日 「口うるさい景色(自作三選 うつろうかたち 中)」(野見山暁治)
 日本経済新聞 2003年8月27日 「ある日(自作三選 うつろうかたち 下)」(野見山暁治)
 西日本新聞 2003年8月30日 「野見山暁治展 油彩中心、初期作から新作まで」(宇田懐)
 和楽 第3巻第9号(2003年9月1日) 「80歳を超えても現役。野見山暁治さんの絵画遍歴(五感を鍛える視る2)」(無署名)
 公明新聞 2003年9月2日 「野見山暁治展 質量ともに充実した回顧展」(宝木範義)
 週刊新潮 第48巻33号(2003年9月4日) 「野見山暁治展 (Invitation to the Exhibition 美の森へ20)」(無署名)
 朝日新聞 2003年9月11日(夕刊) 「『野見山暁治』展 頑固さが生む『脳内山水』」(田中三蔵)
 産経新聞 2003年9月13日 「野見山暁治展 折々の画家の『今』が作品に」(署名:M)
 月刊ギャラリー 第222号(2003年10月1日) 「野見山暁治展(BEST & WORST)」[今月のランキング BEST2 選出へのモニター評](署名:H.T.)
 月刊ギャラリー 第223号(2003年11月1日) 「野見山暁治展(BEST & WORST)」[今月のランキング BEST1 選出へのモニター評](署名:A.T.) / 「野見山暁治展」[今月のBEST1 インタビュー](都築千重子)
 現代の眼(東京国立近代美術館) 第543号(2003年12月-2004年1月) 講演会報告「野見山暁治『自作を語る』(抄録)」(野見山暁治)

13. アンケート調査

調査期間 平成15年9月25日～平成15年9月28日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 212件(30,884人)

アンケート結果 ・良い70.3%(149件)・普通23.1%(49件)・悪い6.6%(14件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

会期が夏休み期間中となるため、小・中・高校、美術に関係する大学、専門学校、画廊、カルチャースクールなどへの宣伝物の配布は夏休み前に終え、効果的な普及・宣伝に努めた。

1階の企画展ギャラリーは、天井高等に変化があるため、本展では、順路を通常とは逆回りにして、大型の近作を天井の高い広々とした空間でゆとりを持って観覧できるようにした。また、照明にも細やかな調整を施すなど展示条件にも最善を尽くした。アンケート結果(「良い」の回答が70.3%)によると観覧者の反応は非常に良好であり、美術雑誌の展評等での評価や、カタログ購買率の高さ(対来館者比率17%。通常は10%)などを考え合わせると、野見山の近年の作品に重点を置いた本展の企画趣旨は、おおむね説得力をもって伝わったようである。

【見直し又は改善を要する点】

目標入場者数は達成されたが、本展が、現代作家としては随一の知名度をもつ野見山の、公立4美術館連携による大規模な個展であることを考えると、必ずしも満足の数値とは言い切れない。美術学校や画廊への積極的な働きかけやインターネット等の効果的活用等、現代作家の個展等の普及・宣伝については、今後ともさらなる工夫・検討の余地が残る。

名エッセイストとして多くのファンをもつ野見山の講演会は予想外の盛況を呼び、聴講希望者が講堂の定員をはるかに上回ったため、急遽、追加講演を設定した。今後は、申込み制にするなど、しかるべき対処を考えたい。

「旅 - 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」(企画展)

方 針

「旅」というテーマを切り口に、国内外の現存・物故を含めた作家10人(組)の作品を展示した。ジャンルは写真・映像・インスタレーション・絵画など多岐にわたり、多様な表現方法が並列する美術の現況を見渡す構成とした。旅という、誰もが感じる感情をかきたてられるテーマと、美術作品の、いながらにして「ここではないどこか」へと観る者を運ぶ、旅にも似た性質を重ね合わせて提示することによって、観客が作品をできるだけ自分自身の問題として受け止めることのできる場を提供しようと試みた。

実 績

1. 開会期間 平成15年10月28日~平成15年12月21日
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 助 成 モンドリアン財団(同国からの作家、アシスタント、クーリエの旅費・滞在費として約2,400,000円の助成を受けた)
協 賛 コニカミノルタ(写真作品の素材およびプリント制作にかかる現物支給のかたちで約800,000円相当の協賛を得た)
協 力 JAL(海外からの作家等招聘にかかる旅費および作品の輸出入にかかる航空運賃を半額に減免するかたちで、前者については約2,150,000円相当、後者については約1,100,000円相当の協力を得た)
吉野石膏(株)(素材提供のかたちで20,000円相当の協力を得た)
4. 出品点数 39件(うち国宝 0件、重要文化財 0件)
5. 入館者数 18,624人(目標 17,000人)
6. 入場料金 個人 : 一般 850円 大学生 450円 高校生 250円
団体 : 一般 600円 大学生 250円 高校生 100円
前売 : 一般 700円 大学生 350円 高校生 150円
割引 : 一般 800円 大学生 400円 高校生 200円
7. 入場料収入 9,093,550円(目標入場料収入 7,183,000円)
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容
「旅」というテーマを切り口に、国内外の現存・物故を含めた作家10人(組)の作品を展示した。出品作家とその出身地、作品のジャンルは以下の通りである。ジョゼフ・コーネル(アメリカ、立体)/ペーター・フィッシュリ&ダヴィッド・ヴァイス(スイス、写真)/雄川愛(日本、インスタレーション)/大岩オスカル幸男(ブラジル、絵画)/小野博(日本、写真)/瀧口修造(日本、オブジェ)/エリック・ファン・リースハウト(オランダ、映像インスタレーション)/ビル・ヴィオラ(アメリカ、同)/渡辺剛(日本、写真・インスタレーション)/安井仲治(日本、写真)。
10. 講演会等 8回 484人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広 報
プレスリリースの作成・発送、記者内見会および記者発表の開催、各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、チラシの大型書店・映画館での配布、鉄道駅(京王線、JR、営団地下鉄)へのポスター提出、割引券付

きしおりおよび割引券付きフライヤーの配布、ホームページ上での展覧会紹介、雑誌・新聞（NHK「新日曜美術館」など）の取材対応などを行った。

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

Tokyo Walker 2003年10月28日号 「どこに行くかは想像力しだい、アートの数だけ旅に出よう！」（無署名）

Fuji TV Art-net（インターネットマガジン）2003年10月 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」（無署名）

港区行政新聞 2003年11月1日 「旅がテーマの10のレッスン展」（無署名）

ぴあ 2003年11月3日号 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン、ありそうでなさそうな10の旅路」（斎藤博美）

高知新聞 2003年11月3日 「未知の地の魅力 企画展『旅』」（署名：K）

The Herald Tribune 2003年11月21日 “Traveler’s Tales Themed show puts views on right path”（Edan Corkill）

Cabiネット 2003年11月号 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」（無署名）

美術遊覧（インターネットマガジン）2003年11月 「『旅ごころ』展」（白坂ゆり）

Domani 2003年11月号 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」（無署名）

美術手帖 2003年11月号 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」（無署名）

月刊Otome 2003年11月号 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」（無署名）

公明新聞 2003年12月2日 「旅に託された希望」（藤田一人）

読売新聞 2003年12月10日 「回顧・美術2003年」

Daily Yomiuri 2003年12月11日 “Embark on a journey of a different kind”（Robert Reed）

山陽新聞 2003年12月16日 「夢の瞬間 形象化 東京近代美術館（ママ）で旅展」（無署名）

赤旗 2003年12月20日 「ニューヨーク・東京 二つの『旅』展」（武居利史）

日本経済新聞 2003年12月27日 「現代美術、移動をテーマに」（無署名）

ヴァンテーヌ 2003年12月号 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」（立川直樹）

ビジオMONO 2003年12月号 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」（サイトウダイスケ）

ART iT 2003年1号 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」（白坂ゆり）

Luca 2003年12月号 「アートに感じる旅へのいざない」（マツシタサチコ）

日経マスタース 2003年12月号 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」（岡野幸治・石井美保子）

月刊ピアノ 2003年12月号 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」（無署名）

婦人公論 2003-04年12-1月号 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン 観光、放浪、亡命...日常から遠ざかって」（橋本麻里）

リビングデザイン 2004年1月号 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」（柳本浩市）

レプリーク 2004年1月号 「始まりも、終わりもない旅・雄川愛」（青野尚子）

スタジオヴォイス 2004年1月号 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」（無署名）

エスクエア日本版 2004年1月号 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」（無署名）

ハーパス・バザー 2004年1月号 「同じ風が吹いている私の家とあなたの家の違いを感じる旅へ」（無署名）

装苑 2004年1月号 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」（村田明久美）

Invitation 2004年1月号 「真実に到達するためのアーティストの終わらない旅」（市原賢研太郎）

美術手帖 2004年2月号 「境界へ向かって、歩き出したその瞬間に旅ははじまる」（石川直樹）

13. アンケート調査

調査期間 平成15年11月13日～平成15年11月16日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)

金曜日の夜間開館中にも1時間行った。

アンケート回収数 297件(母集団18,624人)

アンケート結果 ・良い62.6%(186件)・普通28.3%(84件)・悪い9.1%(27件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

「旅」というテーマは、たとえ美術になじみのない人であっても、なんらかの感情をかきたてられるテーマである。この、美術ファン以外の人々にもアピールする、ある種の普遍性を持つテーマ設定のために、幅広い観客層を呼び込むことができたのではないかと考える。上記「展覧会関連新聞・雑誌記事等」に記載するように、美術専門誌以外の一般誌で数多くの紹介記事が掲載され、またインターネット等による新しい情報媒体で盛んに取り上げられたことは、本展の反響のこれまでにない特質である。

また、本展はいわゆる現代美術展であるが、1940年代から70年代に制作された物故作家による作品を加えたことで、とりわけ若い観覧者に、世代・時代を超えた作品を発見する機会を提供することができた。

なお、これまでの館の自主展において、複数の機関から多額の寄付を受けたことはなく、今後とも企業等との連携の方法を考えていきたい。

特色ある取組みとしては、デザイナーの協力のもと、飛行機の搭乗券を模したチケットや、パスポート型のカタログや会場ガイドなど、印刷物等に旅のイメージをかきたてる工夫を施したことがあげられる。これらを評価する言葉は、新聞・雑誌等掲載記事やインターネット上の感想に多数見られ、また、大型書店や映画会社などからもチラシを配布したいとの申し出を先方より受けた。展覧会への期待をかきたて、また展覧会をより楽しむための雰囲気作りを行うなどの点で、これらの印刷物は、観覧者の満足度を高めるといふ面からも、集客の面からも、効果的だったと考えられる。

その他、出品作家や展覧会担当者、文筆家や研究者によるトーク・講演会などの機会を設け、観覧者との対話の場をできるだけたくさん用意した。また、学校単位による来館の多い時期であり、トークや講演の申し込みについては、すべて展覧会担当者がこれに対応した。

さらに、11月3日(月)「文化の日」は、観覧料を無料とすることをホームページ上等で広く周知したこともあり、入館者数が非常に多かった(当日1,718人;会期中一日平均390人)

【見直し又は改善を要する点】

会場ガイドに平面図をのせて案内するなどの配慮をしたが、アンケートにおいて、会場の順路をもう少しわかりやすくして欲しいとの要望がいくつか寄せられた。この点については一層の改善を心がけたい。また、とりわけ現代美術の展覧会については、展覧会担当者の作品解説等を聞く機会を増やしてほしいとの声も寄せられた。本展では、上記のように出品作家や館外の研究者などによるトーク・講演会の開催に力を入れ、展覧会担当者もこの際聞き手や司会として積極的に発言を行ったが、単独によるトークの実施は、個別の申し込みへの対応を除いて2回のみであり、こうした要望にいかに対応するかは、今後検討すべき課題である。総じて現代美術展は新しい価値観を示すものであり、アンケート中にも「作品や企画の意図がわかりづかった」との意見も見られた。本展では、カタログにも平易な文章を用い、前述の会場ガイドの配布やトーク、講演会の開催など、コンセプトの説明に最大限の力を注いだ。今後一層の工夫を施し、観覧者のさらなる理解を求めていきたい。

「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」展（企画展）

方 針

本展の母体となったのは、ベルン美術館のヨハネス・イッテン財団が企画・組織した「ヨハネス・イッテン 造形芸術への道」展（平成14年よりヨーロッパ2都市で開催）であり、これは、美術教育者としてのイッテンの成果に照準を合わせて、イッテン自身及び彼の教えを受けて作家やデザイナーとなった生徒たちの作品より構成された展覧会であった。しかし、我が国では彼の教育者としての横顔は比較的良好に知られているにもかかわらず、画家イッテンの作品をまとめて紹介する機会がこれまでなかったこと、また、彼と直接交流のあった画家や、彼に教えを受けた生徒とイッテンのつながりを検証する機会にこれまで恵まれなかったこと、の2つの点に鑑みて、本展はイッテン財団の組織した「造形芸術への道」展に、主にイッテン家所蔵のイッテン自身の絵画作品等からなる第1章と、イッテンと日本人画家・生徒の交流を跡づける第2章を加えて、3章立ての構成とした。すなわち、優れた画家であると同時に美術教育者たるイッテンをできるだけ総合的に紹介することを、本展の基本方針とした。

実 績

1. 開会期間 平成16年1月14日～平成16年2月29日
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 共 催 京都国立近代美術館
後 援 スイス大使館
協 賛 アサヒビール芸術文化財団
4. 出品点数 359件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）
5. 入館者数 16,777人（目標 15,000人）
6. 入場料金 個人：一般 850円 大学生 450円 高校生 250円
団体：一般 600円 大学生 250円 高校生 100円
前売：一般 700円 大学生 350円 高校生 150円
割引：一般 800円 大学生 400円 高校生 200円
7. 入場料収入 9,981,650円（目標入場料収入 6,338,000円）
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容
出品作品は、絵画・水彩・素描・版画・写真・日記・書籍・織物・立体作品など359点である。全体は、美術教育者としてのイッテンと彼の生徒の作品からなる「第1章 造形芸術への道」、画家としてのイッテンの作品からなる「第2章 ヨハネス・イッテンの世界」、イッテンと交流のあった日本人画家や彼に教えを受けた生徒たちの作品からなる「第3章 ヨハネス・イッテンと日本」の3章で構成した。
10. 講演会等 2回 参加人数 239人
11. 広報
プレスリリースの作成・発送、記者内見会および記者発表の開催、各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、鉄道駅（京王線、東急線、JR、営団地下鉄）へのポスター提出、京王井の頭線の車内吊り広告、ホームページ上での展覧会紹介、美術館ポータル・サイトへの記事提出、雑誌・新聞の取材対応などを行った。
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
現代の眼（東京国立近代美術館） No.543（2003-2004年12-1月）「ヨハネス・イッテンの造形探求」（山野英嗣）
現代の眼（東京国立近代美術館） No.543（2003-2004年12-1月）「生成の根源へ イッテンの造形世界」（向

井周太郎)

The Japan Times 2004年1月3-10日号 “ Art of Johannes Itten ” (無署名)

ぴあ 2004年1月19日号 「彼が目指した教育と芸術の創造世界」(斎藤博美)

The Asahi Shimbun (朝日新聞国際版) 2004年1月30日 “ Bauhaus innovator Itten still coloring our world ”
(Louis Templado)

月刊タイル 2004年1月号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

藝術公論 2004年1月号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

SPA! 2004年2月3日号 「バウハウスの教育構想の根幹を作った、美術教育家の回顧展」(杉江あこ)

週刊仕事発見 2004年2月3日号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

公明新聞 2004年2月17日号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

美術の窓 2004年2月号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

月刊美術 2004年2月号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

書道界 2004年2月号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

東京アートナビ 2004年2月号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

フィガロジャパン 2004年2月号 「20世紀のデザインの源流! イッテンの芸術世界を徹底的にとき明かす」(中山真理)

o-cube LIVING DESIGN CLUB PROFESSIONAL 2004年2月号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」
(無署名)

小原流挿花 2004年2月号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

STUDIO VOICE 2004年2月号 「初期バウハウスの指導者、独自のデザイン教育思想宇宙」(岡田栄造)

セブンシーズ 2004年2月号 「バウハウス初期、独自の思想を展開した作家の人生と思想」(無署名)

ELLE DECO 2004年2月号 「美術教育家として一流の人物は、画家としても一流だった」(Yuko Murata)

VERY 2004年2月号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

レプリーク 2004年2月号 「身体とアートに関係を追求した初期バウハウスの教育者」(無署名)

マリー・クレール 2004年2月号 「美しい音楽にも似た色と形のバランス。スイス出身の美術家、イッテンとローゼ」(Noriko Kawakami)

日経デザイン 2004年2月号 「創造力が開花しやすい環境とは?」(無署名)

日本カメラ 2004年2月号 「しなやかで官能的な、創造する手」(上野修)

htwi 2004年2月号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

ぴあ 2004年3月22日号 「読者の投票で決定するランキング ぴあテンART」(無署名)

美術画報 2004年3月号 「ヨハネス・イッテン 日本初の回顧展でたどるイッテンの創造と理論」(無署名)

Living design 2004年3月号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(柳本浩市)

アイデア 2004年3月号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

装苑 2004年3月号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

HARPER'S BAZAAR 2004年3月号 「モダンデザインの先駆者、ヨハネス・イッテンの全貌がわかる」(無署名)

TOKYO BROS 2004年3月号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

an an 2004年3月号 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

Invitation 2004年5月号 「初期バウハウス指導者の造形論・色彩論の全貌」(紫牟田伸子)

日経BP社BizTech (インターネットマガジン) 「アートゲノム第5回~能と体が美術作品を創造する過程を垣間見る」(小川敦生)

Japan Design Net (インターネットマガジン) 「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」(無署名)

13. アンケート調査

調査期間 平成16年1月24日
平成16年2月12日～平成16年2月15日(5日間)
調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)
金曜日の夜間開館中にも1時間行った。
アンケート回収数 408件(母集団 16,777人)
アンケート結果 ・良い18.4%(332件)・普通16.4%(67件)・悪い2.2%(9件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本展のアンケート結果によると、80%を超える来館者が「とても良かった」もしくは「良かった」と回答しており、またカタログ販売実績は4,633冊(対来館者比率は28%。通常は10%)に及んだ。この高率を考慮すると、イッテンの活動をできるだけ幅広く、総合的に紹介しようという本展の上記方針は、来館者に説得力を持って伝わったと判断してよいと考える。

3章からなる本展は構成が幾分複雑であり、また出品作品359点の中には細々としたものが多く、しかも絵画・素描から書籍・織物・立体作品まで多岐にわたるため、会場の章・節の解説を兼ねた小冊子を制作・配布したほか、会場構成にも諸種の工夫が必要であった。会場壁面の一部(冒頭の「色彩論」のパート)を濃灰色にしてアクセントを付けたり、展示空間に動的な流れを作るべく斜めの壁を導入したのは、これまでにない特色ある取組みであったと考える。それらは、斬新な試みとして概ね好評であった。

広報・普及に関しては、鉄道駅でのポスター掲示において、美術大学、デザイン学校、美術系予備校などの多い最寄り駅(代々木、高田馬場、国分寺、二子玉川など)に重点掲示するよう手配したほか、本展と関連するパウル・ロゼ展を開催中の多摩美術大学美術館と連携して広報に努めたことなども新しい取組みである。

【見直し又は改善を要する点】

目標入場者数を達成し、また非常に多くの展覧会評等(「12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等」を参照)で取り上げられた点で、本展は、わが国で初めてのイッテン展としては満足のいく反響を得たと考える。しかし、イッテンのとりわけ色彩論関係の著作(邦訳)が、今日でも美術大学、デザイン学校等において主要な参考書目として挙げられている点を考えれば、さらなる普及・宣伝の余地が無かったとは言いきれない。本展は、イッテンを総合的に理解するためのまたとない機会であっただけに、想定来館者層に応じた働きかけなどの点で課題が残る。

「国吉康雄」展（共催展）

方 針

当館では、国吉康雄逝去の翌年（昭和29）に遺作展を開催し、また平成元年には生誕100周年の回顧展が各地で開かれているが、日本生まれのアメリカ人画家として確たる足跡を遺した彼の芸術が十分に知られているとは言い難い。本展では、1990年代以降の内外における調査研究の進展を包括的に踏まえて、国吉の生涯の画業をあらためて見直し、彼の投げかける主題やメッセージを今日の視点から読み解くことを主眼とした。

実 績

1. 開会期間 平成16年3月23日～平成16年3月31日
(平成16年3月23日～平成16年5月16日)
2. 会 場 東京国立近代美術館本館 企画展ギャラリー
3. 共 催 NHK、NHKプロモーション
後 援 外務省、文化庁、アメリカ大使館
協 力 日本航空
4. 出品点数 131件(うち国宝 0件、重要文化財 0件)
5. 入館者数 3,841人(目標 9,000)15年度
(人(目標 5,200人))
6. 入場料金 個人：一般 1,300円 大学生 900円 高校生 500円
団体：一般 900円 大学生 600円 高校生 250円
前売：一般 1,000円 大学生 700円 高校生 300円
割引：一般 1,100円 大学生 800円 高校生 400円
7. 入場料収入 円(目標入場料収入 円) 平成16年度に算定
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容
出品作品は、絵画・水彩(グアッシュ)など105点、写真(内1点はA・ニューマン撮影)26点、計131点である。全体は、いのちの根源へとつながる子供や「海と女性」の像を中心に、渡米後最初期作(1918)より1920-30年代の作品からなる「第1章 いのちの海岸」、1920-40年代の静物、郊外風景、孤愁をおびた女性像などを中心に、アメリカ社会における移民画家たる自身の境位を主題化した「第2章 社会の荒海」、戦時中の作品からカーニバルやサーカスを主題とした最晩年の諸作まで、アメリカ人画家として生きることを決意した国吉のヴィジョンを絵画化した「第3章 いのちの島の建設」の3章で構成した。
10. 講演会等 講演会 3回 参加人数 52人(平成15年度内の1回分)
会期中、平成16年度に2回実施予定
11. 広報
プレスリリースの作成・発送、記者内見会および記者発表の開催、各美術館・公共施設等へのポスター・チラシの発送、鉄道駅(京王線、小田急線、東急線、JR、営団地下鉄)へのポスター提出、ホームページ上での展覧会紹介、雑誌・新聞・テレビ(NHK「新日曜美術館」など)の取材対応などを行った。
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
13. アンケート調査 平成16年度に実施予定。

自己点検評価

評価は平成16年度に行う。

工芸館

「常設展」

方 針

工芸館の常設展は、所蔵する近代工芸・デザイン作品を中心に寄託作品を利用しつつ、1. 明治以降、およそ百年の近代工芸・デザインの歴史に関する展示、2. 各素材別の近代工芸・デザインの名品の展示、3. 近代工芸・デザインに関する特別な意味のある時期、運動や特徴的なモチーフをテーマとした展示、という3つの趣旨のもとに行っている。

実 績

1. 開会期間
常設展「近代工芸の名作 - 友禅と型染」 平成15年5月27日～平成15年6月29日(30日間)
常設展「近代日本の工芸 - 戦後の金工」 平成15年7月8日～平成15年9月7日 (54日間)
常設展「近代工芸の百年」 平成15年12月9日～平成16年2月1日 (45日間)
常設展「近代工芸の名品 - 花」 平成16年2月10日～平成16年4月11日 (56日間/うち平成15年度45日間)

15年度 計174日間
(所蔵作品展のみの開催期間90日間)
2. 会 場 工芸館 2階
3. 出品点数
73件(うち重要文化財 0件)
10件(うち重要文化財 0件)(同時期に「宮田宏平」展を開催したため、スペースが限られていた)
78件(うち重要文化財 0件)
115件(うち重要文化財 0件)(その他、「名品コーナー」に12点出品)
延 276件(うち重要文化財 0件)
4. 入館者数
35,026人(常設展目標入場者数 22,000人)
(「オーストラリア現代工芸3人展」3,463人、「三代藍堂宮田宏平展」8,170人を含む。)
5. 入場料金
一般200円 大学生70円 高校生40円 一般(団体)100円 大学生(団体)40円 高校生(団体)20円
6. 入場料収入(常設展のみの入場料収入 2,972,360円)
(目標入場料収入 2,136,000円)
7. アンケート調査
第1回
調査期間 平成15年12月13日(1日間)
平成16年1月15日～平成16年1月18日(4日間)
平成16年1月24日(1日間) 計6日間
調査方法 来館者に手渡し、記述式
アンケート回収数 231件(母集団 8,517人)
アンケート結果 ・良い64.1%(148件)・普通29.9%(69件)・悪い6.0%(14件)
第2回
調査期間 平成16年3月11日～平成16年3月14日(4日間)
調査方法 来館者に手渡し、記述式
アンケート回収数 166件(母集団 14,876人)
アンケート結果 ・良い71.1%(118件)・普通27.1%(45件)・悪い1.8%(3件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

昨年度、常設展の入館者目標を500人ほど下回ったこともあって、平成15年度は効果的な広報活動を工夫展開した。具体的には、作家やその団体、美術学校などへのきめの細かい宣伝を行うとともに、マスコミの学芸部美術担当に加えて家庭欄、婦人欄担当にも情報を提供した。また、雑誌も工芸誌に加えてデザイン誌、婦人誌、茶道誌などに範囲を広げ、幅広く広報した。また夏休み期間の小中学生向けの企画と宣伝、美術大学の専門学科の特別観覧、一般大学の博物館学課程の見学を積極的に誘致し、入館者を増やす努力を行った。

また、「近代工芸の名品 - 花」に関連して、児童生徒を対象としたワークショップ（「花を染める」）を開催した（詳細は「児童生徒を対象とした事業」を参照）。

【見直し又は改善を要する点】

常設展は、現在、各テーマに沿って行っているが、必ずしも常に人間国宝や芸術院会員等の名品を鑑賞できるとは限らない。そこで、平成15年度においては、所蔵作品展の最終会期に「名品コーナー」を設け、常設展のテーマにとらわれない、当館所蔵の名品を特別に展示することとした。現在、企画展開催期間中は、館全体が企画展の展示に使用されているが、今後は、企画展開催中も含めて、年間を通して観覧者が常に名品鑑賞を行えるよう、「名品コーナー」のような展示スペースを維持することを検討するとともに、観覧者に対して展示されている名品の作家、素材、技法等の詳細な解説を提供する方策を工夫したい。

「今日の人形芸術 - 想念の造形」展（共催展）

方 針

展示は2部構成とし、第1部では初期の帝展出品作や竹久夢二ら当時の人形制作ブームをささえた作り手の作品などを通して歴史的背景を、第2部では伝統的な手法のほかに球体関節人形などここ数十年のうちにはじまった新しい傾向を示す作品を並べ、人形造形における今日的な視点を紹介した。人形芸術の歴史的な推移を展覧した昭和60年度開催の「人形工芸 昭和初期を中心として」を受け、今回の展覧会では、同時代の人形をめぐる様々な傾向を検証することとした。様式や活動の場を越えた多彩な作風の国内作品とあわせ、チェコ、ドイツ、オランダからも6作家19作品を展示した。

実 績

1. 開会期間 平成15年3月28日～平成15年5月18日
(平成15年4月1日～平成15年5月18日)
2. 会 場 東京国立近代美術館工芸館
3. 共 催 TBS、毎日新聞
後援 文化庁
4. 出品点数 101件(うち国宝0件、重要文化財0件)
5. 入館者数 22,379人(目標17,000人)
(21,134人(目標14,000人))
6. 入場料金
一般800円 学生650円 一般(団体)700円 学生(団体)550円
7. 入場料収入 3,110,650円(目標入場料収入 1,651,000円)
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容
近代以降、作家個人の創作の対象となった人形芸術について、その自律した造形性と意味について検証した。第1部として昭和初期に高まった人形創作熱の動向を、第2部では現在活躍する作家の多様な作品を取り上げ、人形芸術の可能性を探った。25作家101点で構成した。
10. 講演会等 7回 786人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
(内、第1回は平成14年度中に実施、103名が参加)
11. 広 報
プレスリリース発送
ポスター・チラシ等発送 704件
交通広告 8件(4日～1ヶ月)
雑誌等の掲載記事(54件)
TBSスポット番組(3月11日から連日)
テレビ放送による展覧会紹介(NHK日曜美術館にて会期中1回、会期後本展覧会に特化した人形特集1回)
毎日新聞特集記事(2003年5月2、3、5日)、その他紙誌掲載147
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
上毛新聞 4月10日朝刊 「今日の人形芸術 想念の造形展 可能性と魅力を探る」
朝日新聞 4月10日夕刊 「美・博ピックアップ 今日の人形芸術 想念の造形展」
東京新聞 4月11日朝刊 「今日の人形芸術 想念の造形展 崇高な聖性を表現した四谷シモン」(中村隆夫)
毎日新聞 4月30日 「今週の1点「今日の人形芸術 想念の造形」から」
VOGUE NIPPON 4月号 「今日の人形芸術展」

ミセス 4月号 「今日の人形芸術展」

毎日新聞 5月2、3、5日 「今日の人形芸術 想念の造形展 上・中・下」(今井陽子)

大阪日日新聞 5月9日 「愛らしさと不気味さ「今日の人形芸術」展」

毎日新聞 5月13日 「皇后さまが「今日の人形芸術」展を鑑賞」

朝日新聞 5月14日 「大西若人:「ひとがた」の魅力、どこに」

セブンシーズ 5月号 「自己愛を具象化する 四谷シモンインタビュー」

和楽 5月号 「今日の人形芸術 想念の造形展 かわいらしく愛らしく玩具ではなく、芸術として」

ドール・フォーラム・ジャパン 37号(6月) 特集2「今日の人形芸術 想念の造形」展

その他テレビ番組等

Vスポット、TBS、3月11日~5月18日

レールにのって、信越放送、3月15日

新日曜美術館、NHK、4月27日

ニュースの森、TBS、5月12日

13. アンケート調査

調査期間 平成15年4月10日~平成15年4月13日(4日間)

調査方法 来館者に手渡し、記述式(午前・午後各1時間)

アンケート回収数 167件(母集団22,379人)

アンケート結果 ・良い77.8%(130件)・普通20.4%(34件)・悪い11.8%(3件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本展は2部構成により、国内外を代表する作家による101点の人形作品を展示した。伝統的な作風から球体関節人形など新しい傾向の作品も同時に並べることで、幅広い観客層の鑑賞者の関心を集めることができた。人形を特集した展覧会は、工芸館では今回で2度目の試みであり、前回の企画とあわせて近現代の人形史を概観することができた。新聞、テレビ等の報道機関をはじめ美術雑誌や婦人雑誌、さらにカルチャーセンター、人形教室等への積極的な働きかけを行った。また、共催者であるTBSにおいて定期的にスポットCMを流したり、情報番組等とのタイアップ、さらに毎日新聞紙上にて大きな広告面をもつなど、情報周知の徹底を図った。またHP上にてギャラリートークの様子やトピックス等の項を設けて頻繁に更新を行った。こうした種々の広報努力もあって、人形作家や一部の愛好グループに留まらず、児童や若者など幅広い観客層に対してアピールすることができた。

【見直し又は改善を要する点】

本展の観衆やメディアの反応から、人形作品に対し、非常に幅広い傾向の関心が窺えた。会期中行ったアンケートでは、時代や作風の異なる作品を並列したことを評価する一方で、具体的な作家名や作風を挙げて展覧会を希望する声も多かった。今後は、近代的な人形制作の道を切り拓いた重要無形文化財保持者の個展や、戦後の新しい傾向を示すグループの展覧会を開催するなど、素材や技法、時代、作風、地域性等の焦点を絞った上で、人形芸術をめぐる様々な傾向を検証していくことが必要と考える。

「オーストラリア現代工芸3人展：未知のかたちを求めて」（企画展）

方 針

近年とみに注目されつつあるオーストラリアの現代工芸を紹介した。今回は解剖学や科学的な現象に深い関心を抱き、そこから工芸の新しい形（フォルム）を模索している3人の女性工芸家の作品を通して、これからの工芸制作が目指す形（フォルム）の問題を考えた。また、こうした活動を通して、海外の関係機関（在日本の組織も含む）との交流や連携の推進を目指した。

実 績

1. 開会期間 平成15年5月27日～平成15年6月29日
2. 会 場 東京国立近代美術館 工芸館
3. 主 催 東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、アジアリンク
企画協力 ジャムファクトリー・コンテンポラリー・クラフト・アンド・デザイン
協 賛 豪日交流基金、オーストラリア・カウンシル
4. 出品点数
27件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）
5. 入館者数 3,463人（目標 4,000人）
6. 入場料金
一般200円 大学生70円 高校生40円 一般(団体)100円 大学生(団体)40円 高校生(団体)20円
7. 入場料収入は、常設展入場料収入に含まれる。
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容
現在オーストラリアで活躍する3人の女性工芸家、ロビン・ベスト（磁器）、スー・ロレイン（金工）、キャサリン・トルーマン（木工）によるオブジェの新作展。3作家27点。また、所蔵作品による「近代工芸の名作：友禪と型染」も同時開催。
10. 講演会等 ギャラリー・トーク 5回 59人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）
11. 広報
交通広告を行った。
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
『陶説』第605号（2003年8月）「オーストラリア現代工芸3人展：未知のかたちを求めて」（外館和子）
13. アンケート調査
調査期間 平成15年6月21日～平成15年6月24日（4日間）
平成15年6月27日～平成15年6月29日（3日間）計7日間
調査方法 来館者に手渡し、記述式
アンケート回収数 195件（母集団3,463人）
アンケート結果 ・良い52.3%（102件）・普通36.4%（71件）・悪い11.3%（22件）

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

日本にはなじみの薄いオーストラリアの現代の工芸家の作品を紹介し、日本の工芸界との類似の問題意識を認識することができたことは、大変有益であった。また、出品作家やオーストラリア側の関係者だけでなく、在日オーストラリア大使館の関係者らとも交流を深めることができたことは、今後の展覧会の企画推進、広報の広がりなどに大いに活かせると考える。

【見直し又は改善を要する点】

オーストラリアの現代工芸に対しては、一般の関心が薄いのか、新聞雑誌等ではほとんど取り上げられず、入館者は少なかった。今後、一般にはなじみの薄い海外の工芸を紹介する際には、美術大学の学生等、現代の海外の作家の活動に対して特に関心を持つ観客層に対して効果的な広報活動を進める等の工夫を行いたい。来館者からのアンケート結果には、「展示の規模が小さい」「出品作品数が少ない」といった批判的な意見が少なからず見られた。本展覧会のように工芸館の一部屋だけを使用する小規模な企画展に際しては、観覧者の期待を裏切るような事態を回避するためにも、事前に展示規模について周知する必要性を痛感した。

「三代藍堂 宮田宏平展 - 金属造形の先駆け」(企画展)

方 針

蝟型鑄造という伝統的な技法で、用を前提としない造形作品(オブジェ)を制作し続け、戦後日本の工芸界をリードしてきた三代宮田藍堂の初期から近年にいたるまでの活動の全貌を紹介し、その特徴ある造形性の根源と近代日本の工芸における位置を探った。

実 績

1. 開会期間 平成15年7月8日~平成15年9月7日
2. 会 場 東京国立近代美術館 工芸館
3. 主 催 東京国立近代美術館、新潟県立近代美術館
4. 出品点数
105件
5. 入館者数 8,170人(目標7,000人)
6. 入場料金
一般200円 大学生70円 高校生40円 一般(団体)100円 大学生(団体)40円 高校生(団体)20円
7. 入場料収入は、常設展入場料収入に含まれる。
8. 担当した研究員数 2人
9. 展覧会の内容
1927年、佐渡島に生まれた宮田宏平は、家業の蝟型鑄金の技法を基礎から学んだ。東京美術学校卒業後は、日展、現代工芸美術展を中心に活動し、用を前提としない前衛的な作品で蝟型鑄造の技法を表現として読みかえていった。半世紀におよぶその活動を、オブジェ作品とジュエリーに大きく2つにわけ、展示。作品点数105点。
10. 講演会等 ギャラリートーク 7回 299人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広 報
プレスリリース発送、ポスター・チラシ等発送 1619件(美術館等52件、図書館141件、大学図書館54件、ギャラリー、工芸系大学259件、加ファ-クル73件、観光関係149件、生涯学習機関12件、公設試験所89件、教育学部系大学42件、小学校883件、宝飾系専門学校8件、日本ジュエリーデザイナー協会)、交通広告19件(1~2週間)、美術館等へのポスター、チラシの配布、新聞、テレビ報道(NHK「新日曜美術館」)
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
宝石の四季 6月 「三代藍堂 宮田宏平展」
毎日新聞 8月11日夕刊 「三代藍堂 宮田宏平展 現実を革新する伝統の力」
読売新聞 8月13日夕刊 「美術博物館情報 三代藍堂 宮田宏平展」
現代の眼 540号 2003年6-7月号 「終りのない物語 水平線の彼方へ」(松原龍一)
現代の眼 540号 2003年6-7月号 「宮田藍堂さんのこと」(山根基世)
13. アンケート調査
調査期間 平成15年7月25日~平成15年7月26日(4日間)
平成15年8月16日~平成15年8月17日(2日間)
調査方法 来館者に手渡し、記述式
アンケート回収数 165件(母集団8,170人)
アンケート結果 ・良い71.5%(118件)・普通23.0%(38件)・悪い5.5%(9件)

自己点検評価

【良かった点，特色ある取り組み】

今回の展覧会は宮田藍堂の出身地であり、また宮田の作品を所蔵している新潟県立近代美術館と共同で開催した。蠟型鑄造という技法が佐渡という特異な文化的背景をもつ土地で育まれ発展してきており、そうした工芸における土着性を理解する上でも、共同で調査し、研究成果を交換できたことは有益であった。展示のみならずカタログ制作においてもその成果を生かすことができたと考えている。今後とも他館との協力は、機会をみつけて取り組み、連携を深めていきたい。

また、小学生を対象として三代藍堂 宮田宏平展にちなんだワークシートを作成し、学校、子供・家族用各施設などに広報し、好評を得、多くの入館者があった（総入館者数に占める小・中学生の割合が、工芸館の他の展覧会では2%を下回るのに対し、本展覧会では4%を超えた。 ）。

【見直し又は改善を要する点】

金工というジャンルが一般になじみにくい上、実用性のない立体造形作品が多く並んだことで、ややわかりにくい印象を与えた。アンケートにも、「どう見たらいいのかわからない」という意見がよせられており、今後は工芸というものの捉え方自体をどうアピールしていくかについても考えていきたい。具体的には、ギャラリートークや講演会の機会を増やすことや、工芸館の所蔵品について解説した本（ギャラリー・ガイド）の出版等が考えられる。また、伝統工芸に分類される作品ばかりでなく、走泥社（前衛陶芸家グループ）をはじめとするオブジェを志向した作品の展覧会の企画をコンスタントに続けていくことも必要である。

「現代の木工家具」展（企画展）

方 針

近年、大きな変貌を遂げた我が国のライフスタイルの中で、真に人間的で安らぎのある生活空間が求められている。その中でとみに注目されてきたのが、木工家の作る一品制作的な家具で、新しい造形分野として認められつつある。今回の展覧会はその新しい木工家具制作の代表的な作家、作品を紹介、工芸と新しい生活空間のあり方を考えた。

実 績

1. 開会期間 平成15年9月20日～平成15年11月30日

2. 会 場 東京国立近代美術館工芸館

3. 主 催 東京国立近代美術館

4. 出品点数

79件（うち国宝 0件、重要文化財 0件）

座れる椅子のコーナー 14点（出品作家作品12点、当館蔵2点）

5. 入館者数 16,935人（目標 9,000人）

6. 入場料金 個人：一般 630円 大学生 340円 高校生 250円

団体：一般 510円 大学生 250円 高校生 140円

前売：一般 530円 大学生 280円 高校生 190円

割引：一般 580円 大学生 310円 高校生 220円

7. 入場料収入 6,082,970円（目標入場料収入 2,849,000円）

8. 担当した研究員数 3人

9. 展覧会の内容

現代の木工作家9名をとりあげ、家具という造形芸術の分野を主導的に開拓してきた彼らのスタンダードといえる作品70点 テーブル、椅子、棚・キャビネット、机等 を出陳した。国内外の伝統を基調とする創作と個の造形やデザインへの指向を發揮した創作を作家ごとに配置して個々の特質とオリジナリティを明らかにしたが、なかに作品のテーマに即して実際の生活空間の演出もおり込んだ。9作家70点。

10. 講演会等 作家座談会（出品作家による）本館講堂にて 1回 80人

ギャラリートーク 5回 416名（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）

11. 広 報

新聞各紙やテレビ等の報道機関、美術・工芸系やデザイン系の専門雑誌、婦人雑誌、また近年急速に普及しているインターネット上での広報につとめた。また工芸・デザイン系の大学や学会、デザインに関わる諸機関、さらに家具・インテリア系ショップ等への広報を積極的に行った。その成果は、実際、そうした関係者や学生、一般等の多数の入館者数や広域からの来館にも反映していたように思われた。

12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

Modern furniture exhibition/ The Japan Times Weekly、9月6日

信濃毎日新聞 9月18日 「特別展「現代の木工家具展 スローライフの空間とデザイン」」

読売新聞長野版 9月19日 「東京国立近代美術館工芸館の木工家具展 県内2作家が招待出品」

しんぶん赤旗 9月21日 「現代の木工家具展」

Saori Kan : ARTS weekend “ Knock on wood ” /THE DAILY YOMIURI、10月9日

新美術新聞 10月11日 「工芸館の初企画 現代の木工家具展」（油井一人）

公明新聞 10月19日 「特別展「現代の木工家具 スローライフの空間とデザイン」」

中日新聞 10月29日 「創作家具へ関心高まる 木工作家・早川謙之輔」
読売新聞 11月8日夕刊 「いぶにんぐスペシャル 木の魂にさわる快感」(芥川喜好)
朝日新聞 11月19日 「現代の木工家具展 「スロー」な魅力存分に」
Contemporary Furniture and Woodworks in Japan/ I CLUB NEWS、9月号・10月号
文化庁月報 9月号 イベント案内 特別展「現代の木工家具 スローライフの空間とデザイン」(諸山正則)
Cabiネット No.35 9月15日号 特別展「現代の木工家具 スローライフの空間とデザイン」
グラフぐんま 10月号 「ものづくりにかける手 家具作家・富田文隆」
チャイム銀座 10月号 近代工芸の名作 第7回 早川謙之輔「クサビの椅子」
編集部：「現代の木工家具」を見る/室内、11月号
Bien 美庵 vol.23 11-12月号 「現代の木工家具 スローライフの空間とデザイン」
NIKKEI DESIGN 11月号「現代の木工家具 スローライフの空間とデザイン」伝統分野で始まった新たな造形表現/

その他テレビ番組、インターネット等

レールにのって、信越放送、9月13日

柴田玲のSUPREME、TOKYO FM、10月23日

新日曜美術館「アートシーン」、NHK、11月2日

Fuji-tv ART NET：展覧会に行こう

Yahoo！ JAPAN：イベント情報

Japan Design Net：デザインイベントエース

Eart：展覧会情報及詳細

美術館.com

ACE Japan：Art Outing: Current Tokyo Exhibitions and Related Pleasures

13. アンケート調査

調査期間 平成15年10月3日～平成15年10月5日・10月18日(5日間)

調査方法 来館者に手渡し、記述式

アンケート回収数 124件(母集団16,935人)

アンケート結果 ・良い77.5%(96件)・普通19.4%(24件)・悪い3.1%(4件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取り組み】

木工家具を総体的にとりあげた当館初の企画展であったが、チラシへの割引券の添付(当館単独主催展では初めて)、広範な普及広報活動に加え、所蔵作品の黒田辰秋の長椅子と備品のジョージ・ナカシマの椅子とともに、本展出品作家全員の協力を得て椅子を提供してもらい、2階ホールに座れる椅子のコーナーを設置するなど、特色ある取り組みを行なった。特に、家具・インテリア系ショップ、あるいはその関連イベント会場等へのチラシ、ポスターの配布・掲示を行った他、美術関係のみならず、家庭・生活関係等の幅広いマスコミに働きかける等、極めて広範で組織的な普及活動を行った結果、とりわけインテリア、デザインに関心のある層に効果的な広報を行うことができたため、予想外の入館者数を得ることができたと考える。

なお、11月3日(月)「文化の日」は、無料観覧日とすることをホームページ上で広く周知したため、入館者数が非常に多かった。(当日1,107人;会期中一日平均273人)

【見直し又は改善を要する点】

概ね好評を得たが、「触れない」、「椅子なのに座れない」といった感想があった。今回は「座れる椅子のコーナー」

を設けたが、今後、同種の展覧会では、同コーナーのように観覧者が実体験を得られる場を増やす工夫が必要と考える。また、家具という陳列作品の性格および大きさから、既存のケースを可能な限り撤収し、直に観覧可能な展示空間を確保した。しかし出品点数がやや多く、手狭な感は否めなかった。今後は、会場の広さ、観覧者の動き等の様々な要素を考慮した上で、計画的な展示を考えていきたい。

「あかり：イサム・ノグチが作った光の彫刻」(特集展示)

方 針

イサム・ノグチがデザインした照明器具「あかり」は、戦後1951年、岐阜の伝統的な提灯産業と彫刻家イサム・ノグチが出会ったことにより誕生した。ノグチはその生涯にわたって「あかり」のデザインに取り組み、多数のあかりを制作した。本展では作品を展示するとともに、写真や関連資料などにより、「あかり」がどのようにして誕生したか、また、「あかり」が制作される過程なども紹介した。

実 績

1. 開会期間 平成15年10月28日～平成15年12月21日
2. 会 場 本館ギャラリー4
3. 主 催 東京国立近代美術館 工芸館
協 力 イサム・ノグチ財団, イサム・ノグチ日本財団, オゼキ
4. 出品点数 48件(うち重要文化財 0件)
5. 入館者数 29,406人(目標 10,000人)
6. 入場料金
一般420円 大学生130円 高校生70円 一般(団体)210円 大学生(団体)70円 高校生(団体)40円
7. 入場料収入は、常設展入場料収入に含まれる。
8. 担当した研究員数 2 人
9. 展覧会の内容
イサム・ノグチがデザインした照明器具「あかり」に焦点を絞り、「あかり」を多角的に紹介。200種類ほどある「あかり」の中から約50点を選んで出品した。照明を使った彫刻作品「ルナー彫刻」を制作していたイサム・ノグチが戦後来日し、建築家谷口吉郎やデザイナー剣持勇らとの交友を通じて日本の地場産業に目を向けるようになり、岐阜の提灯産業と出会ったことにより「あかり」が誕生する。このような「あかり」の誕生の背景を、写真資料等により紹介した。また、過去の「あかり」の展覧会の様子やイサム・ノグチのアトリエの様子を紹介するスライドショー、ビデオ映像等を上映することにより、「あかり」の年代的な変遷も紹介した。
10. 講演会等 4回 170人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広 報
交通広告を行った。
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
Yumiko Watanabe “Sculptor Noguchi’s talent shines on through lamps”The Asahi Shimbun, November 21, 2003
Robert Reed “Shedding light on Noguchi”The Daily Yomiuri, November 27, 2003
西田健作「ちょうちんから光る『彫刻』へ」朝日新聞、2003年12月9日(夕刊)
小川敦生「現代人が退化させた感性を取り戻すために」『NIKKEI DESIGN』第198号(2003年12月)
「日本の伝統素材と技術を現代のプロダクトに昇華した偉人の記録」『COMFORT』第72号(2004年1月)
「提灯と彫刻家の出会いが『光の彫刻』の傑作を生んだ」『STORY』第3巻第1号(2004年1月)
13. アンケート調査
調査期間 平成15年11月6日～平成15年11月9日(4日間)
調査方法 来館者に手渡し、記述式
アンケート回収数 281件(母集団29,406人)
アンケート結果 ・良い73.3%(206件)・普通22.4%(63件)・悪い4.3%(12件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

照明を使った彫刻作品「ルナー彫刻」を制作していたイサム・ノグチが、日本の岐阜の地場産業である提灯産業と出会い「あかり」が誕生することになる、その誕生の背景や制作工程などを、作品のみならず写真や映像資料等によって、観覧者にわかりやすく紹介するようにつとめた。具体的には、実際の制作に使用する木型を展示することに加え、会場内に映像コーナーを設け、過去の「あかり」の展示の様子やイサム・ノグチのアトリエの様子を紹介するスライドショー、ビデオ映像等を上映するなど、観覧者にとって親しみやすい展示となるよう工夫した。さらに、これまで「あかり」の制作年は特定されていなかったが、本展を機に調査を行い、年代的な変遷を明らかにした。

なお、11月3日(月)「文化の日」は、観覧料を無料とすることをホームページ上で広く周知したため、入館者数が非常に多かった。(当日1,625人；会期中一日平均613人)

【見直し又は改善を要する点】

「あかり」の年代的な変遷を紹介する上で、最低限必要となる種類の作品を選定したものの、展示会場の広さが限られているために、やや手狭な感は否めなかった。また、「あかり」が、一般の人々にとっても身近なものであるだけに、来館者アンケートの中には、「インテリアとしての『あかり』が見たかった」など、展示方法に工夫を求める意見も寄せられていた。今後は、限られたスペースの中で、展示会の趣旨にかなう展示を行うために、出品点数の見直しや展示方法について工夫することとしたい。

国立博物館・美術館巡回展

「受容と発展：花開く近代洋画」展

方 針

展覧会テーマの設定や構成などについて、受け入れ館側と十分な話し合いをもち、作品の種別や、制作時期等に関する要望を、可能な限り活かす形での展覧会の実現を図った。

実 績

1. 開会期間	平成16年2月14日～平成16年3月14日		
2. 会 場	丸亀市猪熊弦一郎現代美術館		
3. 主 催	東京国立近代美術館、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、財団法人ミモカ美術振興財団、丸亀市教育委員会		
後 援	朝日新聞高松支局、産経新聞高松支局、山陽新聞社、四国新聞社、日本経済新聞社高松支局、毎日新聞高松支局、読売新聞高松総局		
4. 出品点数	47件		
5. 入館者数	5,588人 国立美術館全体としては2回 18,010人(平成12年度実績:2回 11,959人)		
6. 入場料金	一般 950円 大学生 650円 一般(前売り/団体)760円 大学生(前売り/団体)520円 高校生以下無料		
7. 決算額	入場料収入	2,718,760円	
	図録販売	368,900円	
	合計	3,087,660円	
8. 担当した研究員数	人		
9. 展覧会の内容	東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立国際美術館、国立西洋美術館が所蔵する、日本人画家が影響を受けた西洋の作品を含む名作47点を通じて、日本近代洋画の展開を概観するもの。		
10. 講演会等	講演会	1回	92人
	ギャラリートーク	4回	120人
	ファミリー・ギャラリートーク	2回	14人
11. 広 報	ポスター、チラシ、新聞広告		

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

国立美術館4館からの出品作品を東京国立近代美術館が取りまとめる形で、ほぼ上記方針に沿ってテーマ性の高い展覧会を実施することができたと考える。今回は出品作品を大正期から昭和戦前期の30数年間の油彩画に絞り、同時期の海外作品と対比しつつ「洋画」の展開を追う内容となった。重要文化財を含む出品作品は質的水準も高く、開催地でも好評を得た。

【見直し又は改善を要する点】

平成15年度は、当館の担当する展覧会が丸亀会場のみでの開催となったため、カタログの制作単価が高くなった。平成16年度以降は、同内容の企画を2館程度で開催することとなっているため、この問題は解消され则认为る。

(2) 貸与・特別観覧の状況

中期計画

(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設に対し、貸与及び特別観覧を積極的に推進する。

実績

貸与・特別観覧の件数

(1) 本館

貸与 120件

特別観覧 158件

(2) 工芸館

貸与 37件

特別観覧 52件

自己点検評価

【良かった点、特色ある取り組み】

本館：平成15年度も例年どおり多数の作品を貸し出すことができ、各美術館の活動の充実に寄与したと考える。

また、海外の展覧会への貸し出しも4件あり、日本文化の海外普及にも成果があった。

特別観覧の件数の推移については増加傾向にあるが、画集等の単行本が主流であった時代に比べ雑誌新聞等、美術作品が紹介される媒体が幅広くなったことが背景にあると思われる。

工芸館：昨年度に比べて申請件数は増加した。この理由は当館の収集作品が広く知られるようになってきたためであると思われる。また、専門家や学生に対して熟覧の機会を積極的に提供し、工芸館の収集作品に親しんでもらうと同時に、それを広報活動の一環としても捉えて展開した。

【見直し又は改善を要する点】

本館：貸し出しについては、従来から作品の状態、常設展での使用頻度、巡回先の数などを考慮し、作品の保全に配慮しているが、近年、各地からの貸出依頼が増加しており、調整が難しくなっている。また、貸与に関わる諸々の作業量の増大が研究員への過大な負担を招きつつある。

特別観覧については、その多くが商業利用であることから、現今の社会的な基準に照らして料金を改定することも検討すべきと考える。

工芸館：今後は、貸与、特別観覧とも、単に希望者側のニーズにこたえるのみでなく、工芸館の収集品、活動を広く知ってもらうものとしても位置付け、積極的に展開していくことが重要であると考えます。

*添付資料

貸与件数等の推移（事業実績統計表 p.8）

特別観覧件数の推移（事業実績統計表 p.9）

3 . 調査研究

中期計画

(1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。

- 収蔵品に関する調査研究
- 美術作品に関する調査研究
- 収集・保管・展示に関する調査研究
- 美術史、美術動向、作者に関する調査研究
- 世界の映画作品や映画史に関する調査研究等

(1)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。

(2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

実 績

1 . 調査研究

(1) 収蔵品の調査研究

[本館]

- 『東京国立近代美術館 所蔵品目録 絵画』（中林和雄他）
- 「[小企画展]『美術と音楽』によせて」（古田亮）
- 「[講演会報告]所蔵作品をめぐる《花ひらく木をめぐる抽象》 パウル・クレーの反復の芸術」（三輪健仁）
- 「[作品研究]麦僊の庭 土田麦僊《舞妓林泉》について」（中村麗子）

[工芸館]

- 「松田権六「桜螺細碗」と紫陽花寺の「明月碗」（金子賢治）
- 「内藤四郎「銀流線文箱」（北村仁美）
- 「稲垣稔次郎「型絵染屏風」に染められた「平家物語」（今井陽子）
- 「前史雄「沈金箱 朝霧」（諸山正則）
- 「岩田藤七「ガラス飛文平茶碗」（木田拓也）

(2) 展覧会のための調査研究

[本館]

- 牛腸茂雄に関する調査研究（牛腸茂雄展：増田玲、保坂健二郎）
- 昭和10年代の洋画にみられる“地平線”の意味と、その浪漫主義的傾向についての調査研究（「地平線の夢」展）（「地平線の夢」展：大谷省吾、鈴木勝雄）
- 野見山暁治に関する研究（「野見山暁治展」）（「野見山暁治展」：都築千重子、鈴木勝雄）
- 現代美術における「旅」のテーマに関する研究（「旅 『ここではないどこか』展」：蔵屋美香、保坂健二郎）

国吉康雄に関する研究（「国吉康雄展」）（「国吉康雄展」：蔵屋美香、尾崎正明）

[工芸館]

- 戦後プロダクトデザインの成立と展開に関する研究（「イサムノグチのあかり」展）
- 現代木工と家具制作の特質についての研究（「現代の木工家具」展）
- 明治時代の工芸概念の胚胎と変遷のための資料調査（「近代工芸の百年」展）

(3) 収集・保管・展示・教育普及に関する調査研究

[本館]

「東京国立近代美術館の半世紀」連載18「教育普及活動のあゆみ 友の会について(1)」(蔵屋美香)
「東京国立近代美術館の半世紀」連載19「教育普及活動のあゆみ 友の会について(2)」(蔵屋美香)
「東京国立近代美術館の半世紀」連載20「教育普及活動のあゆみ 京橋時代」(一條彰子)
「[教育普及レポート]夏休み!こども美術館」(一條彰子)
「[教育普及レポート]来館者とともに見る・考える MOMATガイドスタッフによる所蔵品ガイド」(一條彰子)

(4) 科学研究費補助金による調査研究

「日本文化の多重構造 近代日本美術に見る多文化的要素の系譜 1900年-1980年」(本館)

2. 客員研究員等の招聘実績 工芸館 1名(年度計画記載人数: 工芸館 1人)

3. 調査研究費 予算額 44,747,000円 決算額 37,463,472円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館: 館の調査研究活動は(1)所蔵品の調査研究、(2)展覧会のための調査研究、(3)収集・保管・展示・教育普及に関する調査研究が中心である。基本的には、より広範囲な問題を含む、直ちに展覧会事業等に直結しない基礎研究・調査については、(4)科学研究費補助金を申請し、他機関の研究員を含むより大きな体制で臨んでいる。いずれも、美術館活動の基盤を成すものとして欠くことができないものであり、その成果は展覧会活動、出版物、報告書等で随時発表している。また、客員研究員を必要に応じて採用しているが、平成15年度は採用していない。平成15年度の実績については上記のとおりで、収集品や展覧会についての調査は、当初の目的をほぼ達成したと考えている。

収集品の調査研究については、その成果は常設展の構想や構成等に反映させるとともに、「現代の眼」や「研究紀要」など当館の刊行物において発表された。また、「ギャラリー4」を始めとする所蔵品ギャラリーの一角を用いた特集展示という形で公にされた(2(1))「常設展」を参照)。

展覧会のための調査研究は、その成果を主にカタログや講演会等の形で公表した。平成15年度は「青木繁と近代日本のロマンティズム」展で石橋財団石橋美術館と、「野見山暁治展」で大分市美術館、富山県立近代美術館、愛知県美術館と共同で調査研究を実施したほか、平成16年度の「国吉康雄展」(愛知県美術館、富山県立近代美術館と共催)、「ブラジル:ポディ・ノスタルジア」展(京都国立近代美術館と共催)、草間彌生展(京都国立近代美術館、広島市現代美術館、熊本市現代美術館、松本市美術館と共催)等についても、共同で研究調査を進めている。いずれも積極的な資料や情報交換が行われ、非常に有意義であった。今後も、展覧会の組織形態に即してこうした共同研究を進めたいと考えている。

科学研究費補助金による「日本文化の多重構造 近代日本美術に見る多文化的要素の系譜 1900年-1980年」は、全体を6部門にわけて研究を進めており、平成15年度は昨年度に引き続き、それぞれ基礎的な資料の蓄積に努めた。その成果は一部、「青木繁と近代日本のロマンティズム」展で発表したが、最終的には平成16年度の報告書で公表する予定である。

なお、(3)収集・保管・展示・教育普及に関する調査研究の内、保存修理に関する調査研究は、当館に保存修理の部門がないこともあり、特段のことは実施していないが、修理にあたって外部の専門家と十分な打ち合わせを行い、修理完了後には必ず修理報告書の提出を求めて知識の習得に努め、保存・修理のための基本資料(データ)として蓄積している。

工芸館: 広報を兼ね、工芸館の所蔵作品の中から、美術雑誌、工芸関係誌などに「名品紹介」と題して作品の解説を行っている。さまざまな視点から解説を行うための研究活動によって、所蔵作品の研究が非常に進展している。展覧会研究はカタログに反映した。

また、客員研究員については、工芸館で開催する展覧会とコレクションに関する調査研究を行うために招聘した。

さらに、美術史学会東支部例会(研究発表会)で、研究員、客員研究員による「現代工芸の自立的造形思考」

シンポジウムを行った。

【見直し又は改善を要する点】

本館：美術館研究員の場合、研究の成果は展覧会、あるいはカタログの形で多く発表されることは否めないものの、近年では個人レベルで学会発表するケースも見られるようになっており、今後とも、研究成果の外部への積極的な公表を促進することとしたい。

* 添付資料 調査研究一覧（事業実績統計表 p.96）

4 . 教育普及

中期計画

- (1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。
- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。
- (2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
- (3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。
それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。
- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員（キュレーター）の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。
- (5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。
また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。
- (6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。
- (6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

方 針

教育普及活動は美術館のもつ知識をさまざま形で提供することで、来館者に美術への関心と理解を高めてもらうとともに、より美術館を身近なものとして感じ、美術館の愛好者となってもらうことを大きな狙いとしている。そのため的手段、方法は種々考えられるが、対象となる層は子どもから大人まで、また美術館未経験者から専門家まで多岐にわたっており、それぞれに対してきめのこまかな対応をする必要がある。

特に、工芸館については、工芸作品鑑賞の特性を踏まえ、素材・技法、作品解説、作家のデータなど、多様な情報をできるだけ多種多様な媒体と機会を提供する必要がある外、会場で実際の作品を観ながら鑑賞と理解を深めるために、当館研究員のほか、作家・館外研究者等によるギャラリートークを実施していきたい。

実 績 (総括表)

(1) - 1 資料の収集及び公開

本館

収集件数 5,371件
公開場所 本館アトライブラリ(本館2階)
利用者数 2,315人
貸出件数 5,545件(館内閲覧のみ、館外貸出はしていない。)

工芸館

収集件数 3,604件
公開場所 工芸館図書閲覧室(工芸館1階)
利用者数 260人
貸出件数 1,047件(館内閲覧のみ、館外貸出はしていない。)

(1) - 2 広報活動の状況

刊行物による広報活動 10種

ホームページによる広報活動

本館・工芸館のホームページにおいては、画面上の展覧会情報に会場風景、作品図版、各種トピック及び用語解説(工芸作品)を掲載するほか、最新情報(「トピックス」欄)や、講演会・ギャラリートーク等イベント情報(「イベント」欄)の充実を図った。また、「こどものページ」を開設し、本館・工芸館の所蔵品・展覧会の普及や、春休み等の児童生徒向けプログラムの告知に努めた。さらに、更新頻度を増やして閲覧者の興味を高めるとともに、インターネットにおける情報検索時の露出を向上させるよう努めた。

また、平成15年度からの取り組みとして、メールマガジンの発行(毎月発行)を開始し、展示作品や展示予告を始めとして、来館者のニーズに対して、美術館の側から積極的に配信する試みを始めた。

マスメディアの利用による広報活動

本館では、各展覧会開催に際して、雑誌(美術専門誌や情報誌)・新聞・テレビ向けの資料(プレス・リリース)にカラー印刷による図版を掲載し、見所を簡潔に要約するなど、その充実を図った。また、代表的な情報誌「ぴあ」の展覧会紹介欄を年間枠で買い取り、定常的な広報媒体とするなど、広報力の強化を図った。

工芸館では、次の3誌に所蔵品を取り上げた連載を行い、近現代工芸及び東京国立近代美術館の活動全般の周知に努めるとともに、そのときどきの展覧会の広報普及を図っている。

ア.「近代工芸の名作」『月刊チャイム銀座』

イ.「細部の真実 東京国立近代美術館工芸館所蔵品より」『茶道誌淡交』(平成15年4月~12月)

「古典が息づく現代の工芸 東京国立近代美術館工芸館所蔵品より」『茶道誌淡交』(平成16年1月~)

ウ.「日本の至宝 東京国立近代美術館コレクションより」『TAIKI』(季刊)

また、次の2誌に情報を提供し、各号で展覧会広報を行っている。

ア.「展覧会情報」『ICLUB』(発行:伊勢丹)

イ.「私だけが知っている人間国宝 泣きっ面 ふくれっ面 笑い声」『婦人画報』(発行:アシェット婦人画報社)

(1) - 3 デジタル化の状況

本館

平成15年度にデジタル化した美術作品の件数 480件

工芸館

平成15年度にデジタル化した美術作品の件数 1,100件

(2) - 1 児童生徒を対象とした事業

児童生徒を対象にした事業としては、申し込みに基づく随時の講演会、ギャラリートーク、職場見学の受入れ等を行っている。平成15年度受入れ実績の詳細は、小中高校生に関しては「(2) 児童生徒を対象とした事業」

を、また、大学生に関しては「(6) 大学等との連携」を参照のこと。

本館

小学校： 7件(246人)

中学校：10件(83人)

高校： 2件(57人)

(参考)小中高校教員の研究会等への協力： 5件

ホームページ内に「こどものページ」を設けている。

ボランティアのガイドスタッフによる子ども向けギャラリートーク(所蔵作品解説) 12回
(詳細は「児童生徒を対象とした事業」を参照)

工芸館

中学校：2件(12人)

(参考)大学：2件(51人)

(参考)高校の教員の研究会：1件

ホームページ内に「こども工芸館」を設けている。

所蔵作品展「近代工芸の名品 - 花」に関連して、児童生徒を対象としたワークショップ(「花を染める」)を開催した。(詳細は「児童生徒を対象とした事業」を参照)

(2) - 2 講演会等の事業(詳細は別添資料参照。)

本館

講演会	15回	1,599人
ギャラリー・トーク	17回	652人
所蔵品ガイド(ボランティアによる)	200回	2,521人
パフォーマンス	1回	118人

工芸館

講演会	0回	0人
対談・座談会ほか	3回	415人
ギャラリー・トーク	39回	1,611人
パフォーマンス	0回	0人

(3) - 1 研修の取組

本館

平成15年度は、国立美術館上級キュレーター研修生の受け入れなし。

工芸館

なし

(3) - 2 大学等との連携

本館

博物館実習生の受け入れ 平成15年8月25日~平成15年8月29日(5日間)(8人)

大学授業、学界等への協力 8件11回(472人)

生涯学習施設等への協力 6件8回(175人)

大学等との協力のもとに講演会を実施 1件(122人)

工芸館

博物館実習生の受け入れ 平成15年8月21日~平成15年8月27日(5日間)(4人)

校外授業として熟覧を実施 平成15年7月21日(武蔵野美術大学芸術文化学科5人)

校外授業として熟覧を実施 平成16年1月12日(多摩美術大学工芸学科陶プログラム46人)

毎年1回博物館実習生の受け入れを行っている。美術大学等と協力関係を結び、個別にギャラリートークや熟覧等の機会を設けるとともに、授業の一環として工芸館での作品観賞の時間を設定している。今後は美術大学で制作を学ぶ大学院生や助手、教員等の協力を得て、アーティストトーク等を所蔵作品展期館内に設ける予定である。

(3) - 3 ボランティアの活用状況

本館

登録人数 20名(平成14年12月21日~15年5月10日の研修期間修了後、正式に登録)

平成15年5月23日より、常設展開催期間中の毎日、「MOMATガイドスタッフによる所蔵品ガイド」を実施した。

工芸館

登録人数 20名(平成16年5月16日の研修終了後、正式に登録。)

工芸館では平成16年6月から展覧会での解説および触知による作品鑑賞補助のためのボランティア導入を予定している。平成15年度は、ボランティア導入実施に向けて、募集・教育を実施した。

(4) 渉外活動

展覧会において各企業から協賛、協力を得たほか、モンドリアン財団(オランダ)から助成を受けた。(「(10) 渉外活動」参照)

(5) 友の会活動

なし

(6) 教育普及経費 予算額 137,779,000円 決算額 82,451,935円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：教育普及事業は来館者の増加ばかりでなく、その理解を少しでも手助けし、美術館に親しんでもらうことを目的としている。そのために、当館では、資料の収集と公開、各種事業による美術館教育、美術館活動についての広報、学芸員、学芸員養成のための研修、美術館を支援する組織の開拓と運営を大きな柱にさまざまな事業を考えている。はライブラリの設置と情報のインターネット上での公開、は講演会やギャラリートークの実施、学校との連携による子ども向けの美術館教育、は「現代の眼」、年間カレンダーの発行、ホームページの制作、は学芸員実務者研修、博物館実習、はボランティアの募集とギャラリーツアーの実施、企業との連携などが主なものである。

平成15年度は、そのほとんどについて当初の目的を達成したと考えている。については、昨年1月の図書検索(OPAC オンライン検索カタログ)のインターネット公開に続き、平成15年度は、東京都現代美術館、横浜美術館の蔵書を横断的に検索できるシステムを共同で開発し、公開した(3月1日)。館内でのデジタル画像の公開については、平成13年度の著作権許諾に続いて、平成15年度も75名からの許諾を得ており、来館者システムでの画像公開は進展している。また、文化庁の「文化遺産オンライン」に535点の作品基本文字データ及びカラー・デジタルデータを提供して、協力した。

昨年度の評価で指摘されたの学校教育との連携に関しては、現在においても可能な限り学校現場の要求に対応しているが、今後、ボランティアのガイドスタッフの協力を得て、受け入れ能力の拡大を図る方向であり、現場の教師、美術教育の専門家の意見を参考にしながら進めていきたい。小中学生など年少の来館者を対象としたプログラムとしては、ボランティアによる「子ども向け所蔵品ガイド」を春期・夏期休暇に合わせて実施する予定で

あり、平成15年度は、その試験的試みとして、「夏休み！こども美術館」及び「春休み！こども美術館」などの新しいプログラムを開始した。

講演会等については、各展覧会に連動して多面的なプログラムを実施することによって、来館者の芸術理解を一層深める努力をしている。また、昨年度から準備してきたボランティアのガイドスタッフによる対話型ギャラリートークが平成15年5月23日から開始され、開館期間中、毎日「所蔵品ガイド」を実施して好評を得た。

本館におけるアトライブラリの利用に関しては、入室者数、公開資料数、公開請求件数、いずれも昨年度に比べて倍増しており、図書室利用案内の作成や図書館専門誌での広報による効果が見られていると考える。

また、平成15年度の展覧会では、講演会及び展覧会場でのギャラリートークに特に力を注いだ。いずれの展覧会でも2回ないしはそれ以上講演会を実施した他、ギャラリートークについては、比較的混雑の少ない展覧会で多く実施した結果、所蔵作品解説も含めて、全体で14回実施することができた。とりわけ出品作家自身によるトーク（自作解説）は、美術館ならではのプログラムとして人気があり、今後も力を入れていきたい。また、新規の事業として、平成15年5月からボランティアによる「所蔵品ガイド」（毎日）を、平成16年1月から「研究員によるハイライト・ツアー」と「研究員によるフライデー・トーク」を開始した。特に所蔵品ガイドの対話式トークは、参加型の特色ある取り組みとして雑誌等に紹介され、繰り返し参加する観覧者も多い好評のプログラムである。

工芸館：ギャラリートークの回数を当初の計画よりも増やすとともに、テーマを設けて内容をわかりやすく周知するように心がけた。また、館外の研究者や作家などに講師を依頼し、内容を多様化するよう試みた。特に、「三代藍堂 宮田宏平展」では作家のサイン会を開催し、好評を得た。

一昨年、昨年と続く一般誌への工芸館の活動並びに近現代の工芸作品の紹介を2誌から3誌に増やし、その普及の推進に努めた。また昨年に引き続き2誌に展覧会情報を定期的に掲載した。

「三代藍堂 宮田宏平展」開催期間中、来館したこどもにワークシートを配布し、鑑賞の一助とした。また、昨年度より開始した鑑賞カードの作成を継続して、所蔵品展との関連を強めて24種類を増やし、作品についての知識や鑑賞を深めたいとする入館者の要望に応えた。カードには作品の細部を掲載するとともに、基礎データや鑑賞のポイントを表記した。さらに、初めての試みとして「現代の木工家具」展覧会リーフレットに割引券を付け、積極的な誘致活動も行った。すべて平成16年度以降も継続の予定である。

昨年度の報告書において、改善を要する点であげた映像による作品紹介については、ギャラリートークや作家座談会、対談をビデオ撮影し、2階の休憩室で上映してそれに替えた。

【見直し又は改善を要する点】

本館、工芸館を通じて、映像による美術館案内や作品紹介が少ない。特に、本館のビデオコーナーのソフトについては、今後、設置場所の検討も含めて、系統的に整備する必要がある。また、アトライブラリは、昨年度に比べて利用者は倍増しているものの、いまだ十分に活用されているとは言えず、なお一層の広報が必要だと考えている。友の会については、当館はかつてこの制度を有していたが、次第に活動が鈍り、取り止めるに至ったという経緯がある。来館者サービスというよりは、美術館の支援サークルとしての側面をどのように育てていくか、といった課題もあり、検討してきたが、平成16年度には、賛助会員制度の導入を予定している。

また、工芸館においては、これまでに築いた作家・研究者を含む館外関係者とのネットワークをさらに活用し、講演会やシンポジウム、ワークショップなどにより幅広い活動を計画していきたい。また平成16年度から始まるガイドスタッフによる解説においても作家の協力を仰ぎ、参考作品や資料の収集に努めたい。ガイドスタッフに関しては研修の段階であるが、工芸館ならではの作品の触知による鑑賞を促すとともに、専門性の高い工芸の知識や見所を一般鑑賞者にもわかりやすく伝えられるよう、独自の視点で実施すべく現在準備を進めている。

*添付資料

教育普及件数の推移（事業実績統計表 p.11）

(1) - 1 資料の収集及び公開（閲覧）の状況

中期計画

(1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。

実績

1. 収集

(1) 本館

件数 5,371件

(2) 工芸館

件数 4,077件

2. 公開

(1) 本館

公開場所 アートライブラリ（本館2階）

公開日数 229日間

公開件数

・公開資料数 5,545件

・公開請求件数 1,743件

(2) 工芸館

公開場所 工芸館図書閲覧室（工芸館1階）

公開日数 174日

公開件数

・公開資料数 1,047件

・公開請求件数 260件

自己点検評価

【良かった点、特色のある取組み】

本館：本館アートライブラリは5,371件の図書・カタログ・雑誌を受け入れ、平成15年度末現在の蔵書総数は、87,871点の図書・カタログと、3,151誌の雑誌となった。また、平成15年度中に行った資料の交換件数は、国内機関との間で268件、国外機関との間で207件であった。

昨年度（平成15年1月）に、図書検索（OPAC オンライン検索カタログ）をホームページに公開したが、平成15年度は、同じように美術館の図書室でOPACを公開している東京都現代美術館、横浜美術館の蔵書を横断的に検索できるシステムを共同で開発して、3月1日より公開した。個別にOPACを検索することなく、3美術館（5図書室）の蔵書約28万点の図書・カタログと8,000誌の雑誌を一括して横断的に検索することができるこのシステムにより、利用者の美術資料へのアクセスは格段に向上し、3美術館相互において、資料共有への可能性を高めた。また、東京国立近代美術館の3つの図書室を紹介するパンフレットを作成して、来館者及び近隣の関係機関等へ配布するなど、広報活動にも力を入れた結果、一日平均利用者数が倍増（5人10人）するなどの効果があった。『情報管理』（科学技術振興事業団）及び専門図書館協議会発行の会誌にアートライブラリ関係記事が掲載された点も広報に資するものであった（なお、平成15年度より、アートライブラリは専門図書館協議会会員館となった。）。また、5月には、閲覧室の開架書架を増設することによって、新着図書、特に近時の展覧会カタログが閉架書庫から出納することなく、自由に閲覧することが可能となり、アートライブラリの資料でも、特に利用希望の高い展覧会カタログへのアクセス性が高まった。また、平成1

5年1月より、土曜日も開室して閲覧サービスの時間帯を拡大し、一般の利用者およびボランティア（ガイドスタッフ）の自己研修に役立てた。

工芸館：工芸館図書室は、3,604件の図書・カタログ・雑誌を受け入れ、平成15年度末現在の蔵書総数は11,076点の図書・カタログと625誌の雑誌となった。また、昨年度に設置した図書閲覧室の利用者は、昨年度の89人に対し、平成15年度は260人であり、約2倍の利用者があった。このことは、図書閲覧室を紹介する広報活動を行うとともに、工芸館で開催する展覧会にあわせた参考図書および関連図書の紹介を、館内配布印刷物やホームページ上で積極的に広報を行った結果といえる。また、平成16年1月より、工芸館ガイドスタッフの研修が始まり、それに伴い工芸の各素材の基礎書籍や辞書を購入し、ガイドスタッフの自己研修に役立てた。一方で、作家の個展カタログやリーフレット等一般では入手し難い資料にも注意を払い収集を行っている。

【見直し又は改善を要する点】

本館：アトライブラリの年間利用者数は、2,315人であり、平成15年1月からの土曜開室、及びOPACの公開や広報活動に伴って、一日平均利用者数（約10.1人）は、昨年度に比べてほぼ倍増しているものの、引き続き、資料の収集整備と併せて、ホームページその他の媒体を活用しながら広報して、利用の促進に努めていきたい。平成15年度に実現した美術図書館の横断検索については、平成16年度は参加館を増やして、横断検索の可能範囲をさらに広められるよう努める。書誌データの蓄積についても、図書・カタログ・雑誌の基本的な書誌情報に加えて、より文献の内容を反映する個々の目次情報についても、データ量を増やす必要がある。当館開催展覧会カタログ及び主要美術雑誌の記事データについては、既に着手しているが、平成16年度より採録対象の雑誌を増やしていく必要がある。

工芸館：工芸・デザイン関係の書誌を体系的に収集している施設は国内でも稀有であり、工芸館図書室に対する研究者の注目はますます高まることと思われる。今後も継続して基礎資料の充実を図るとともに、平成16年度以降はグローバルな視点で工芸作品を捉えられるよう、海外作家や作品の図書資料収集にも力を入れていきたい。また、図書閲覧室の場所がわかりにくいという指摘があり、館内各所に案内表示を出すことで利用者への周知を図ってきたい。

(1) - 2 広報活動の状況

中期計画

(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。

また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。

実 績

1. 刊行物による広報

(1) 美術館ニュース「現代の眼」

発行年月日 偶数月発行（発行回数6回、発行部数6冊）（年度計画記載発行回数6回）

料 金 350円

配布先 運営委員等，都道府県の中央図書館，大学附属図書館，都道府県渉外学習センター，研究機関等
特記事項 平成15年度より本館・工芸館の特別展・企画展にあわせた特集を組み、展覧会の副読本ともなるような

編集を心がけるとともに、会期にあわせた発売時期を設定し、来館者が鑑賞時に有効に活用できるように心がけた。

(2) カレンダー（展覧会予定表）

発行年月日 1回発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数2回）

料金 無償

配布先 会場内配布，都内の小中学校等

(3) 年報

発行年月日 1回発行（発行回数1回）（年度計画記載発行回数1回）

料金 無償

配布先 大学附属図書館・研究機関等

(4) 所蔵品目録

ア．「東京国立近代美術館 所蔵品目録 絵画」

イ．「東京国立近代美術館 工芸館 所蔵品目録 工芸」

ウ．「東京国立近代美術館 工芸館 所蔵品目録 デザイン」

(5) 展覧会図録

ア．「青木繁と近代日本のロマンティシズム」展図録

料 金 2,000円

イ．「牛腸茂雄展」図録

料 金 800円

ウ．「地平線の夢 昭和10年代の幻想絵画」展図録

料 金 1,200円

エ．「野見山暁治展」図録

料 金 2,000円

オ．「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」展図録

料 金 900円

カ．「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」展図録

料 金 2,000円

キ．「国吉康雄」展

料 金 2,000円

ク．「今日の人形芸術 - 想念の造形」展

料 金 1,800円

ケ．「オーストラリア現代工芸3人展：未知のかたちを求めて」

料 金 400円

コ．「三代藍堂 宮田宏平展 - 金属造形の先駆け」

料 金 1,800円

サ．「現代の木工家具」展

料 金 1,600円

シ．「あかり：イサム・ノグチが作った光の彫刻」

料 金 1,100円

ス．「受容と発展：花開く近代洋画」展

料 金 1,700円

(6) 研究紀要

発行年月日 1回発行(発行回数1回)(年度計画記載発行回数1回)

料金 無償

配布先 大学、研究機関等

(7) 概要

発行年月日 1回発行(発行回数1回)(年度計画記載発行回数1回)

料金 無償

配布先 美術館、区内学校、研究機関等

(8) パンフレット(日本語版、英語版)

発行年月日 1回発行(発行回数1回)

料金 無償

配布先 会場内配布、問い合わせへの対応

(9) フロアプラン(所蔵品ギャラリーガイド)(日本語版、英語版、仏語版、独語版、中国語版、韓国語版)

発行年月日 平成15年12月

料金 無償

配布先 会場内配布、問い合わせへの対応

仏語、独語、中国語、韓国語版については、東芝国際交流財団の助成を受けて作成した。

(10) 図書室利用案内

発行年月日 平成15年9月

料金 無償

配布先 美術館、大学等

2. インターネットを用いた広報

ア．ホームページ(展覧会スケジュール等に連動して更新、随時小更新)

画面上の展覧会情報に会場風景、作品図版、各種トピック及び用語解説(工芸作品)を掲載するほか、講演会、ギャラリートーク等イベント情報の充実を図っている。また、更新頻度を増やして閲覧者の興味を高めるとともに、インターネットにおける情報検索時の露出を向上させるよう努めている。

イ．メールマガジン(毎月発行)

展示作品や展示予告を始めとして、来館者のニーズに対して、美術館の側から積極的に配信するメディア

として送信を開始した。

3. その他の広報

本館：

ア. プレス・リリースの充実

「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」展以降、プレス・リリースをカラー印刷とし、従来のカラー・コピーと同程度のコストで、出品作品等の魅力をより正確に伝えられるようにした。また、プレス関係の画像の貸出をデジタルデータに統一することで、広報活動の利便性を向上させ、プレス側からのさまざまな要望に柔軟に応えられるようにした。

イ. 「ぴあ」との年間契約

代表的な情報誌「ぴあ」の展覧会紹介欄を年間で13枠買い取り、定常的な広報媒体とした。年間契約とすることによって、講演会情報の告知における優先権などを得た。

ウ. 年始における朝日新聞マリオン欄への出稿

朝日新聞マリオン欄(1月4日付け)に、「ヨハネス・イッテン - 造形芸術への道」と「所蔵作品展 近代日本の美術」の予告を載せた。

エ. 各展覧会の性格に応じた広報活動に努めた。一例として、「旅」展においては、想定される観覧者と客層の似たいくつかの大型書店(リブロ、青山ブックセンターなど)に働きかけ、ポスター・チラシの配布やPR誌上での展覧会紹介記事の掲載など、さまざまな協力を得た。

オ. これまで、特別展のポスターは、最寄り駅(営団地下鉄東西線・竹橋)に通じる東西線と京王線及びJRの駅にのみ掲示してきたが、平成15年度から、展覧会によっては小田急線・東急線の駅における掲示を始めた。

工芸館： 次の3誌に所蔵品を取り上げた連載を行っている。

ア. 「近代工芸の名作」『月刊チャイム銀座』

その月の展覧出品作のなかから一点名品を選び、その見所、歴史的意義、作家のプロフィールなどを解説する。

イ. 「細部の真実 東京国立近代美術館工芸館所蔵品より」『茶道誌淡交』(平成15年4月~12月)

工芸は細やかな素材に対する配慮と高度な技術によって作られている。この連載は所蔵作品の中から名品を一点選び、その写真と拡大写真を比較掲載し、細部の造りがいかに全体の印象と違うか、また細部がいかに作品全体を構成しているかを見ることによって、工芸の面白さを知ってもらう。

「古典が息づく現代の工芸 東京国立近代美術館工芸館所蔵品より」『茶道誌淡交』(平成16年1月~)

工芸作家の制作において、何世紀にもわたって伝えられてきた各時代のジャンルの異なる古典がさまざまな形で息づいている。この連載は所蔵作品の中から名品を一点選び、古典がどのように生かされ、作品制作と結びついているかをみることによって、工芸作品の奥の深さを知ってもらう。

ウ. 「日本の至宝 東京国立近代美術館コレクションより」『TAIKI』(季刊)

所蔵作品の中から名品を一点選び、その見所、作家のプロフィール、歴史的意義などを解説する。

また、次の2誌に情報を提供し、各号で展覧会広報を行っている。

ア. 「展覧会情報」『ICLUB』(発行：伊勢丹)

在日外国人に対する展覧会情報の提供。

イ. 「私だけが知っている人間国宝 泣きっ面 ふくれっ面 笑い声」『婦人画報』(発行：アシェット婦人画報社)

展覧会に出品している人間国宝のエピソードを親しい関係者から取材、紹介し、あわせて展覧会情報提供する。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館： 「現代の眼」については本館・工芸館の特別展・企画展に連動した特集を組み、各会期に合わせた発行時期を設定するとともに、展覧会の副読本ともなるような編集を心がけた。また、定期購読に対する特典を設けて、その旨をチラシ等により広報し、定期購読者の拡大に努めた。

また、平成15年度より配信を始めたメールマガジンの購読者数は、2004年3月31日現在で1,000人を超えており、当館の活動に継続的な関心を持つ人への広報手段として、またそうした人を増やす手段として、今後も内容を拡充するなど、発展的に活用していきたい。

工芸館：昨年度より1誌多い3誌において、工芸館の活動ならびに近現代の工芸作品についての理解を促すための普及活動に力を入れた。また昨年度に引き続き、2誌に展覧会情報を定期的に提供し、広報普及することができた。

【見直し又は改善を要する点】

本館：「現代の眼」の編集・発行については、年度当初に年間スケジュールを作成し、できるだけ早い原稿依頼・編集を心がけているが、それでもなお遅れが出るがあった。原稿遅延への対策などを強化して、期日内に発行できるようにしていきたい。また、インターネットを用いたメールマガジンの試みについては、技術上、デザイン上の専門的スタッフを要する新しい活動分野であり、今後その充実を図るためには諸種の課題がある。

工芸館：上記のような試みを今後も継続するとともに、過去に工芸館の活動に興味を示した媒体等に積極的に働きかけ、さらに一層、工芸館の周知を徹底できるよう、広報の内容を検討し、改善していきたい。

(1) - 3 デジタル化の状況

中期計画

- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。
また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。

実 績

1. 所蔵作品のデジタル化

(1) 本館

平成15年度にデジタル化した美術作品の件数	430件
平成15年度末収蔵作品数	8,964件
平成15年度末デジタル化作品数	8,689件(カラー:3,040画像 白黒:10,080画像)
今後のデジタル化の対応	毎年500件をデジタル化予定

(2) 工芸館

平成15年度にデジタル化した美術作品の件数	1,097件
平成15年度末収蔵作品数	2,447件
平成15年度末デジタル化作品数	2,117件(カラー:1,200画像 白黒:1,200画像)
今後のデジタル化の対応	毎年100件をデジタル化予定

2. ホームページのアクセス件数 5,133,194件(平成12年度アクセス件数 129,602件)

3. デジタル化した情報の公開

(1) 本館

- ・ホームページ等によるデジタル画像公開件数 7,346件(館内:5,696件 館外:1,650件)
- ・ホームページでの作品文字データの公開件数 8,709件

(2) 工芸館

- ・ホームページ等によるデジタル画像公開件数 82件(館内:32件 館外:50件)
- ・ホームページでの作品文字データの公開件数 2,441件

自己点検評価

【良かった点、特色のある取組み】

本館：本館美術作品のデータベース化は、基本文字データは新規受け入れ作品もあわせて全点について入力を完了させており、画像のデジタル化も、モノクロ画像を含めるとほぼ9割を超えて完了している。今後は、カラーポジの作成が進み次第、速やかにデジタル化するよう努める。3階会場内にある情報コーナーにおいて来館者向け端末を公開しているが、昨年度に引き続き、平成15年度は75名の著作権者の許諾を得ることによって、端末での画像公開数は、順調に増加しており、過半数の作品の画像が閲覧できるようになった。ホームページでの画像公開は、著作権の切れたものについては、作家・作品解説文とともに閲覧できるよう、システムを刷新した。著作権のあるものについては、文化遺産オンラインの権利処理ガイドラインの策定まで、一括での許諾処理および公開の予定はない。

工芸館：平成15年度も引き続き、所蔵作品のデジタル化の推進に努めた（平成15年度中1,097件）。また、ホームページへの展覧会情報の掲載ではできるだけ多くの作品を掲載するように心がけた。

【見直し又は改善を要する点】

本館：ホームページでは、基本文字データのデータベース検索システムを公開しているが、デジタル画像については、著作権が切れた作品、もしくは当館の代表的な作品として「とうきんびコレクション」に選定し、ホームページ上での公開について特に許諾を得たものに限り、公開するにとどまっている。ホームページの所蔵作品検索システムにおいて、著作権の切れた作品については、平成15年度同様、デジタル画像を公開表示するようにつとめる。あわせて、作家・作品の解説文の蓄積を拡大して、一層の情報提供につとめる。

工芸館：画像及び文字情報のデジタル化については、今後も継続的に努力していきたい。展覧会情報については昨年度以上に掲載することができたが、工芸の基礎知識やエッセイなど多様な情報については増やすことができなかったため、その改善を検討するとともに、より一層の工芸館の周知のための工夫を重ねていきたい。

【計画を達成するために障害となっている点】

作品画像の館内での公開については、著作権者の許諾を得たものはおおむね目的を達しており、今後も著作権処理につとめていくこととするが、館外（インターネット）での公開については、著作権処理の問題が大きく、現在、文化庁をはじめ国全体で権利処理のためのガイドラインに取り組んでいる状況であり、今後は、その動向を見極めつつ、文化庁の文化遺産オンラインとも連携しながら、対応を検討していきたい。

(2) - 1 児童生徒を対象とした事業

中期計画

(2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。

また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

実績

本館、工芸館とも児童生徒を対象にした事業としては、申し込みに基づく随時の講演や概説、展示案内等、展覧会の内容や対象年齢に合わせたきめ細やかな対応を心がけている。児童生徒だけでなく、その指導者である教員からの要望に対してもできるだけ対応し、こちらからも折にふれて積極的な働きかけを行って連携を強めている。

(1) 本館

平成15年度の小中高校生の受け入れ実績は下記のとおりである。大学生に関しては「(3) - 2 大学等との連携」を参照のこと。

小学校： 7件(246人)

中学校： 10件(83人)

高校： 2件(57人)

(参考) 小中高校教員及び教育関係者の研究会等への協力(講演、展示解説等)： 5件

八千代市教育委員会、東京都図画工作研究会、練馬区小学校教育会図画工作部、文京区小学校教育研究会図画工作部、東京都高等学校美術工芸教育研究会

開催場所： ギャラリー内、講堂、エントランスホール等

ホームページによる広報

ホームページ上の「こどものページ」の内容の充実を図り、当館の主な作品の図版、見方のヒントなどを掲載。児童生徒が感想の書込みを行える仕組みとした。

ボランティアによる小中学生向けプログラム(「(3) - 3」ボランティアの活用状況)を参照)

ア. 「夏休み!こども美術館」として、夏休みの期間中、ボランティアのガイドスタッフによる、ギャラリートーク(所蔵作品解説)及びワーク(所蔵作品解説と連動した制作実習)の小中学生向けプログラムを行った。

3日間 毎日2回ずつ(計6回) 18グループ(小学生93人、中学生45人)

イ. 「春休み!こども美術館」として、春休みの期間中、ボランティアのガイドスタッフによる、小中学生向けのギャラリートーク(所蔵作品解説)を行った。

3日間 毎日2回ずつ(計6回) 18グループ(小学生17人、中学生26人)

(2) 工芸館

平成15年度の小中高校生の受け入れ実績は下記のとおりである。大学生に関しては「(3) - 2 大学等との連携」を参照のこと。

中学校： 2件(12人)

(参考) 高校の教師の研究会： 1件(「あかり：イサム・ノグチの光の彫刻」展にて)

ホームページ内に「こども工芸館」を設け、作品鑑賞のポイント、素材・技法の特性などを画像入りでわかりやすく解説した。

平成16年度からのボランティア導入に伴い、児童生徒を対象とした事業「鑑賞教室」の再開を目指し、現在準備を進めている。

所蔵作品展「近代工芸の名品 - 花」の会期中、小中学生を対象としたワークショップ(「花を染める」)を開催した。外部講師(出品作家、染色作家)の指導のもと、「シェイブド・ダイ」(絞り染めの一種)の方法で、自由に花をイメージして布を染める体験を提供した。(小学生 14人、中学生 1人)

小学生を対象として、企画展「三代藍堂 宮田宏平展 - 金属造形の先駆け」に関連したワークシート「三代らんどう・ゆびわ物語」を作成し、事前に学校等に配布するとともに、来館した小学生に配付し、鑑賞の一助となるようにした。

自己点検評価

【良かった点、特色のある取組み】

本館：ボランティアによるギャラリートークと連動して、夏期・春期休暇中の小・中学生を対象にした上記2事業を開始した。本館及び工芸館では、学年単位、クラス単位での館の活動の概説、展示案内等の要請や、修学旅行時などに予約を受けた中学生への解説・案内を可能な限り受けるなど、きめ細やかな対応を心がけた。また、上述のように小中高校等の図画工作・美術工芸の教員からなる研究会に対して、館の活動や常設展・企画展の概説などを行い、美術館教育等について話し合う機会を持ったが、こうした活動は、学校や社会教育関係団体と相互理解を図り、連携協力を進めていく上できわめて重要であることが再認識された。

工芸館：企画展「三代藍堂 宮田宏平展 - 金属造形の先駆け」にワークシート「三代らんどう・ゆびわ物語」を配付し、子どもたちが掲載作品を見つけてスタンプを押したり感想を書き込んだりしながら展覧会を楽しむとともに、作品の魅力を理解するようにつとめた。

【見直し又は改善を要する点】

本館：美術館が児童生徒を対象とした各種プログラムを実施していることを、様々な方途を通じて、より周知する必要がある。平成15年度において、それらの事業の広報は、主に「現代の眼」とホームページを通じて行い、また、小中学生など児童生徒に対する会場案内等を随時受付けている旨をホームページ上で周知したが、今後は、メールマガジン等も利用して、より一層積極的に働きかけていきたい。

工芸館：工芸においては初等中等教育における工芸作品の鑑賞は未だ後進の域にあるが、一方では伝統的な素材・技法による制作、さらに実際にもものに触れながらの学習への関心が高まっている。工芸館では、今後、ボランティアの導入に伴い、こうした意欲に対応するよう現在、様々な視点から検討しているところである。平成16年度も、これまでに行った調査・準備を反映し、児童生徒を対象としたワークシート作成等を計画している。

(2) - 2 講演会等の事業

中期計画

(3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。

それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。

実績

1. 本館

(1) 講演会 15回(年度計画記載回数: 8回)

開催期間 計15日

開催場所 本館講堂

参加者数 1,599人 1回平均107人(平成12年度実績183人)

担当した研究員数 各回約3人(講演者含まず)

事業内容 各展覧会に合わせて、出品作家・当館研究員・外部の専門家等による講演を行った。但し、その内1回は当館所蔵作品についての講演会である((3)-2「大学等との連携」の項を参照)。

(2) ギャラリートーク 17回(年度計画記載回数: 9回)

常設展を対象としたギャラリートーク

ア. 研究員による所蔵品ガイド(年5回、所蔵品展ごと最初の土曜日)

開催期間 計4日

開催場所 所蔵品ギャラリー

参加者数 119人 1回平均30人

担当した研究員数 各回1人

事業内容 所蔵品展の見どころを解説

イ. 研究員によるハイライトツアー(毎月第1日曜日無料観覧日、14時から50分程度)

開催期間 計3日

開催場所 所蔵品ギャラリー

参加者数 75人 1回平均25人

担当した研究員数 各回1人

事業内容 近代美術の流れを辿りながら、所蔵品の見どころを解説

ウ. 研究員によるフライデートーク(月1回、金曜日、企画展開催時、18時から1時間以内)

開催期間 計3日

開催場所 所蔵品ギャラリー

参加者数 36人 1回平均12人

担当した研究員数 各回1人

事業内容 所蔵品に関して、テーマを絞った専門的解説

企画展を対象としたギャラリートーク

開催期間 計7日
開催場所 企画展ギャラリー
参加者数 422人 1回平均60人(平成12年度実績 140人)
担当した研究員数 各回約3人(トーク講師含む)
事業内容 各展覧会の内容に合わせたギャラリートークを行った。研究員だけでなく外部の専門家
や
出品作家にも行ってもらい、来館者との対話の場を設けた。

ガイドスタッフによるギャラリートーク

(3)-3「ボランティアの活用状況」を参照。

(3) パフォーマンス

開催期間 計1日
開催場所 講堂
参加者数 118人
担当した研究員数 3人
事業内容 「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」展および同日に行った講演会
の内容に合わせて、作家によるパフォーマンスを開催した。

(4) アンケート結果

講演会 (回答数53件)・良い73.58%(39件)・普通24.53%(13件)・悪い1.89%(1件)
ギャラリートーク (回答数63件)・良い77.77%(49件)・普通20.64%(13件)・悪い1.59%(1件)

2. 工芸館

(1) 講演会 (年度計画記載回数: 0回)

(2) 対談・座談会ほか(年度計画記載回数: 0回)

開催期間 計3日
開催場所 本館・講堂
参加者数 415人 1回平均138.3人(平成12年度実績 0人)
担当した研究員数 各回1~5人(講師含む)
事業内容 各展覧会に合わせ、出品作家と当館研究員による対談および座談会等を行った。

(3) ギャラリートーク (年度計画記載回数: 23回)

常設展を対象としたギャラリートーク

開催期間 計15日
開催場所 展示会場
参加者数 346人 1回平均23.1人
担当した研究員数 各回約1人(トーク講師含む)
事業内容 各展覧会に合わせ、当館研究員によるトークを行った。

企画展を対象としたギャラリートーク

開催期間 計24日
開催場所 企画展展示会場
参加者数 1,265人 1回平均52.7人

担当した研究員数 各回 約1人(トーク講師含む)

事業内容 各展覧会に合わせ、出品作家や当館研究員、外部の専門家等によるトークを行った。

(4) アンケート結果

講演会 (回答数21件)・良い100.00%(21件)・普通 % (件)・悪い % (件)

ギャラリートーク (回答数81件)・良い70.37%(57件)・普通22.22%(18件)・悪い7.41%(6件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：講演会、ギャラリートーク共に、展覧会の内容に即して幅広い主題によるプログラムを組み、また、出品作家本人の話聞く機会をできるだけ多く設けた(「野見山暁治展」及び「旅」展)結果、平成15年度は当初計画(17回)よりもはるかに多数の講演会等(32回)を開催することとなった。なお、常設展のギャラリートークについては、参加者のアンケート結果や意見に基づいて、その動機や目的の多様性、知識や経験の違いに対応すべく日時・内容の異なる3種の解説プログラムを設定した。

工芸館：当初の計画にはなかったが、さまざまな角度から作家や作品についての理解を深められるよう、展覧会の出品作家と当館研究員による対談及び座談会を行った。ギャラリートークはとくに積極的に開催し、会期中のほぼ毎週土曜日の同じ時間に行うことによって、認知度を高めることができた。また、テーマを設けることによって内容を事前に周知させるよう心がけた。トークの回数を増やしたことで、研究員も専門以外の分野の知識向上につながるとともに、業務の充実にもつながった。

【見直し又は改善を要する点】

本館：平成15年度の講演会等の事業は、主に企画展に連動した講演会(於講堂)と、主にコレクションの展示に連動したギャラリートーク(於所蔵品ギャラリー)の2本立てで実施されたが、ボランティアによる児童生徒向けの新規プログラムを追加したこともあり、平成11年度から平成12年度にかけて実施された「連続講座」は、平成15年度は休止となった。また、講演会は、講演内容や講演者によっては聴講希望者が講堂の収容定数を越えるため、事前申込み制(抽選制)とせざるを得ないが、当日聴講を強行に要求する来館者が必ずいるため、円滑な実施のためには申込み制を周知徹底するなど、方策を検討したい。

工芸館：ギャラリートークの回数を増やしたことで認知度は高まったと思われるが、平成16年度はガイドスタッフの解説も行われるため、当館研究員又は外部講師によるものとのすみ分けが必要となってくると思われる。このあたりを考慮しつつ、平成16年度も積極的にギャラリートークの回数を増やし、展覧会鑑賞の一助となるように努力したい。また、出品作家と研究員による対談形式のトークも加えることによって、様々な角度からトーク内容の充実を図っていきたい。

(3) - 1 研修の取組

中期計画

- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員（キュレーター）の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。

実 績

学芸担当職員（キュレーター）研修について

キュレータ実務研修

平成15年度は、受け入れなし。

自己点検評価

【見直し又は改善を要する点】

キュレータ実務研修は、美術館等で既にしかるべき学芸員経験を積んだ者を対象者として想定しているが、そうした学芸職員を一定期間東京に派遣・駐留させるためには、派遣する側にとって予算面、人員面でかなりの負担が必要である。一方、展覧会開催などに際して国公立美術館が連携する機会はむしろ増えており、今後は、特定の展覧会プロジェクトとの関連で実務研修の機会を探るなど、さまざまな視点からの検討が必要と思われる。

(3) - 2 大学等との連携

実績

1. 博物館実習生

(1) 本館

受入期間 平成15年8月25日～平成15年8月29日(5日間)

開催場所 本館(会議室・アトライブラリ・所蔵品ギャラリー)

参加者数 8人(平成14年度実績8人)

担当した研究員数 11人(受入れ担当2、講義等9)

事業内容 講義・館内見学・ギャラリー・トーク実施・展覧会案立案など。

特記事項 「来館者に作品を伝える工夫」というテーマを設定。実習として、最終日に所蔵作品のギャラリートーク(解説)を行った。

(2) 工芸館

受入期間 平成15年8月21日～平成15年8月27日(5日間)

開催場所 工芸館(会議室)

参加者数 4人(平成13年度実績4人)

担当した研究員数 7人(客員研究員を含む)

事業内容 講義、館内見学、作品取り扱いなど。

2. その他の連携・協力

(1) 本館

大学、生涯学習施設等の授業への協力(講演会、展示解説等を実施)

ア. 大学授業、学会等への協力 8件 11回 (472人)

女子美術大学(2回 70人・70人) 東京造形大学(1回 20人) 武蔵野美術大学(1回 15人) 共立女子大学(3

回 75人・80人・60人) 南華大学興芸術管理研究所(台湾)(1回 21人) 日本女子体育大学(1回 26人)

バンタンデザイン研究所(1回 15人) 日本色彩学会(1回 20人)

イ. 生涯学習施設等への協力 6件 8回 (175人)

河田美術鑑賞会(1回 7人) NPO法人ふれあい塾あびこ(1回 22人) 名画鑑賞会クラッセ・デ・ミルド

(1回 6人) 江東区森下文化センター(2回 20人・30人) 多摩美術大学生涯学習センター(2回 30人・30) 群

馬県伊勢崎市立図書館老人会(1回 30人)

大学等との協力のもとに講演会を実施

開催期間 1日

開催場所 本館講堂

参加者数 122人

担当した研究員数 約3名

事業内容 学習院大学との協議のもと、同大学が招聘したチューリヒ大学講師ヴォルフガング・ケルステ

ン氏による当館所蔵品(パウル・クレー作《花ひらく木をめぐる抽象》)をテーマにした講演会を、日本パ

ウル・クレー協会との共催(スイス大使館後援)で行った。

(2) 工芸館

校外授業として作品熟覧 2件

平成15年7月21日(武蔵野美術大学芸術文化学科5名)

平成16年1月21日(多摩美術大学工芸学科陶プログラム46名)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：博物館実習については、講義や館内見学等により美術館の仕事の全体像を伝えるとともに、特に「来館者に作品を伝える工夫」というテーマを設け、各実習生によるギャラリー・トークの模擬演習を研修プログラムに組み入れた。これにより、実習生には、実習に主体的に関わってもらうことができ、また、作品と来館者をつなぐという美術館の重要な役割を実践的に学んでもらうことができた。参加学生の満足度も高く、一定の成功を収めたと考える。

工芸館：参加者には、大学で得た知識をもとに、実際の美術館活動についての学習を促した。特に、さまざまな素材の作品に触れる機会を提供したことで、作品の取り扱いの技術の習得と、複雑な素材・技法から成り立っている工芸作品に対する理解を深めることにも結びつけることができたと考える。

【見直し又は改善を要する点】

本館：博物館実習や授業への協力とは別の形で大学との連携を図る方途については、諸種の話し合いを継続中であるが、いまだ具体化には至っておらず、平成16年度も引き続き検討を続けることとしたい。

工芸館：博物館実習期間中以外にも、大学との提携に力を入れ、熟覧や個別のギャラリートークを通して、大学のカリキュラムとの連携を築けるよう、積極的にアプローチを試みたい。また、研究者及び制作者にも熟覧やギャラリートークの機会を提供するよう働きかけ、学生のみには偏らないように留意していきたい。

(3) - 3 ボランティアの活用状況

中期計画

(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。

実績

本館

1. 登録人数 ガイドスタッフ 20人(平成15年5月10日研修終了)
2. 実施回数 248回
3. 参加人数 3,023人
4. 活動内容

開館日の午後2時半より(12月より、午後2時からに変更)約1時間、来館者との対話を交えながら、所蔵作品についてのギャラリートークを行った。また、一般客向けのものとは別に「夏休み!こども美術館」、「春休み!こども美術館」として、小中学生を対象とするギャラリートークなどを計12回実施した((2)-1「児童生徒を対象とした事業」を参照)。常設展が替わるたびに例会を開催し、展示替えについて研究員による講義を受け、研究員による所蔵品ガイドに参加するほか、その時々の問題点等について協議しながら、ギャラリートーク・プログラムを運営してきた。また、活動開始前の研修(平成14年12月21日~平成15年5月10日)を補うものとして、平成15年度は当館研究員による「日本画の技法について」の補講を行ったほか、「春休み!こども美術館」の開始に備えて、館外講師2名(中央区立坂本小学校教諭・岸本雅行氏、坂戸市立浅羽野中学校教諭・武藤篤美氏)による「こどもの発達と鑑賞」と題したフォローアップ研修を実施した。

工芸館

展覧会での解説および触知による作品鑑賞補助のためのボランティア導入を平成16年度に予定している。平成15年度は、ボランティア導入に向けて、スタッフの募集・採用・教育を行った。

(ガイドスタッフ 20人、平成16年5月16日の研修終了後、正式に登録)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：活動方針(作品と来館者を結ぶ掛け橋となる)、活動内容(毎日1回定時の所蔵作品ガイドを行う)、受け入れ体勢などについて入念な検討を加えて募集に踏み切り、10回の研修会を経て活動を開始したため、ボランティアによる所蔵作品解説は順調に進んでいる。ガイドスタッフは、5月23日の活動開始後も、参加者に充実した鑑賞体験を提供するために当館アトリエ等を利用して絶えず自己研鑽に励んでおり、これまでに退会者は一人もおらず、ガイド・プログラムに遅延・中止等が生じたこともない。作品について一方的に説明するのではなく、参加者とディスカッションを行いながら、ガイドスタッフと参加者がともに鑑賞経験を高めあうスタイルは、雑誌等(『ドーム』誌、vol.71、平成15年12月1日発行、20-26頁)にも紹介され、当館の特色を打ち出すものとなっている。また、年度計画作成時点では、活動初年度であるため、小中学生向けのプログラムを織り込んでいなかったが、夏休み及び春休み期間中のためのプログラム((2)-1「児童生徒を対象とした事業」を参照)を開始し、平成16年度以降の活動の充実のための備えとすることができた。

工芸館：工芸館ならではの活動内容や活動方針を十分に検討した上で募集に踏み切ったことで、現在20人のガイドスタッフに対する研修は、現時点までかなり円滑に進んでいると考えている。特に研修生による作品ガイド実習とそのディスカッションの様子を見る限り、積極的な活動意欲を強く感じ、多彩な工芸作品への対応に

も期待を寄せている。工芸館の特色を出すために工芸作品の触知による鑑賞法をフタッフとともに検討し、専門性の高い工芸の知識や鑑賞のポイントを、予備知識を持たない幅広い年齢層の利用者にもわかりやすく伝えられるよう努めている。

【見直し又は改善を要する点】

本館：平成15年9月17日から12月24日までの参加者アンケート（372件）を分析し、活動内容等について点検、検討を加えた。2年目に当る平成16年度秋には、追加募集を検討する予定である。

工芸館：本館で平成15年度より実施しているガイドスタッフの良いところを取り入れつつ、工芸館ならではの活動内容を、絶えず点検、検討し、より深みのある活動ができるように考えていきたい。また、触知による鑑賞に必要な教材等の準備も同時に行い、円滑な導入を進めることが課題と考える。

(4) 渉外活動

中期計画

(6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

実績

1. 企業等との連携

「青木繁と近代日本のロマンティズム」展

協賛：三井不動産、東レ

「旅 - 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」

助成：モンドリアン財団

協賛：コニカミノルタ

協力：JAL、吉野石膏株式会社

「ヨハネス・イッテン - 造形芸術の道」展

後援：スイス大使館

協力：アサヒビール芸術文化財団

「オーストラリア現代工芸3人展：未知のかたちを求めて」

企画協力：ジャムファクトリー・コンテンポラリー・クラフト・アンド・デザイン

協賛：豪日交流基金、オーストラリア・カウンシル

「あかり：イサム・ノグチが作った光の彫刻」

協力：イサム・ノグチ財団、イサム・ノグチ日本財団、オゼキ

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本館：自主企画による特別展「旅 - 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」については、海外からの作家・随行員（計5名）の招聘及び作品借用を伴う大規模な国際展であったため、民間企業に対して様々な形で協力・援助を申し入れた。その内で主な成果として、オランダのモンドリアン財団より、作家・アシスタント・随行員の招聘費として15,805ユーロ（約2,400,000円）という異例の助成を受け、日本航空株式会社からは、作家等の招聘及び作品輸送費に係る経費を半額に減免する形で、合計で約3,250,000円相当の協力を得たことなどは特筆される（詳細は2-(1)「展覧会の状況」参照）。

また、各展覧会の性格に応じた広報活動に努めた結果、美術書等の品揃えで定評のある都内の大型書店数店から、ポスター・チラシの配布やPR誌上での展覧会紹介記事の掲載などの協力を得たことも成果の一つである（(1)-2「広報活動の状況」参照）。

工芸館：「オーストラリア現代工芸3人展」では、出品作家の招聘および作品の海外輸送費に係る経費の全額について豪日交流基金とオーストラリア・カウンシルからの協力を得た。また、「あかり」展では、作品借用料について、イサム・ノグチ財団およびオゼキから協力を得た。また、各展覧会の性格に応じた広報活動を積極的に行った結果、都内や近郊に大型店舗を構える家具店にポスターやチラシの配布などの協力を得ることができた（(1)-2「広報活動の状況」参照）。

【見直し又は改善を要する点】

本館：日本航空（JAL）からは、作品の国際輸送費や海外からの招聘費について、これまでもたびたび経費を減免する形で協力を得ているが、今後は他の企業とも一定程度恒常的な連携・協力関係を築くべく、その可能性

を探る必要があると考える。

工芸館：「オーストラリア現代工芸3人展」では、出品作家の招聘および作品の海外輸送費に係る経費の全額について豪日交流基金とオーストラリア・カウンシルからの協力を得た。また、「あかり」展では、作品借用料について、イサム・ノグチ財団およびオゼキから協力を得た。また、各展覧会の性格に応じた広報活動を積極的に行った結果、都内や近郊に大型店舗を構える家具店にポスターやチラシの配布などの協力を得ることができた((1) - 2「広報活動の状況」参照)。

5 . その他の入館者サービス

中期計画

- (1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。
- (1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。
- (1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。
- (1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイドやハイビジョン等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。
- (2) 入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努力する。
- (3) ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。

実 績

1 . 高齢者・身体障害者のための施設整備等

(1) 本 館

障害者トイレ	3個所(1階 1個所, 2階 1個所, 地下1階 1個所)
障害者エレベータ	2基
段差解消(スロープ)	2個所(正面玄関)
貸出用車椅子	5台(1階)

(2) 工芸館

障害者トイレ	1箇所(1階)
障害者エレベータ	1基(1階)(障害者対応ではない)
スロープ	1個所(正面玄関)
リフト	1基(正面玄関)
貸出用車椅子	3台(1階)

2 . 観覧環境の充実

音声ガイド	日本語
展覧会名	「青木繁と近代日本のロマンティズム」展
貸出期間	H15.3.25~5.11
貸出件数	3,152件(利用率5.56%)

3 . 夜間開館等の実施状況

(1) 夜間開館実施状況

本館	ア.開催日数	51日間
	イ.入館者数	14,700人(総入場者数300,957人,入場者率4.88%)
	ウ.実施内訳	
	「常設展」	51日間
	入館者数	6,374人(総入場者数152,415人,入場者率4.18%)
	「青木繁と近代日本のロマンティズム」展	6日間 15年度
	入館者数	2,009人(総入場者数52,713人,入場者率3.81%)
	「牛腸茂雄」展	8日間
	入館者数	1,090人(総入場者数15,082人,入場者率7.23%)
	「地平線の夢 昭和10年代の幻想絵画」展	7日間
	入館者数	514人(総入場者数10,621人,入場者率4.84%)
	「野見山暁治展」	8日間
	入館者数	1,153人(総入場者数30,884人,入場者率3.73%)

「旅 『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」展 9日間
 入館者数 874人(総入場者数18,624人,入場者率4.69%)
 「あかり:イサム・ノグチが作った光の彫刻」 9日間
 入館者数 1,710人(総入場者数29,406人,入場者率5.82%)
 「ヨハネス・イッテン-造形芸術の道」展 7日間
 入館者数 894人(総入場者数16,777人,入場者率5.33%)
 「国吉康雄」展 1日間(H.16.3.23~3.31)15年度
 入館者数 82人(総入場者数 3,841人,入場者率2.13%)

(2) 小中学生の入場料の低廉化

昨年度に引き続き、平成15年度の共催展についても共催者の協力を得て小中学生の観覧料金の無料化を実施した。

(3) (2) 以外の入場料への取り組み

ア. 平成15年度から学生料金を大学生料金と高校生料金に分け、高校生料金の低廉化を図った。

・美術館(常設展)

学生 130円(団体 70円) 大学生 130円(団体 70円)、高校生 70円(団体 40円)

・工芸館(常設展)

学生 130円(団体 70円) 大学生 70円(団体 40円)、高校生 40円(団体 20円)

・フィルムセンター(普通観覧)

学生 100円(団体 50円) 大学生 70円(団体 40円)、高校生 40円(団体 20円)

イ. 江戸開府400年記念事業

江戸開府400年記念事業「ぐるっとパス(常設展共通入場券)」に参加し、入場料金の低廉化を図った。

本館 6,960人

工芸館 4,425人

フィルムセンター 3,816人

「ぐるっとパス」とは、都内の美術館、博物館、動物園など31機関が参加する企画であり、1ヶ月以内であれば、1,800円で全ての参加機関に入場できるチケットである。(通常料金であれば、約15,000円)

なお、平成16年度においては、チケットの価格は2,000円となるが、参加機関が44館に増えると共に利用期間が1ヶ月から2ヶ月に延長される。当館も常設展入場券に企画展割引券を加えて参加する。

ウ. 外国人観光客への対応(クーポン券)

「ウエルカムカード」外国人来館者に対し常設展を割引料金とした。

本館 割引利用者 200人(外国人総入場者数 6,083人)

工芸館 割引利用者 40人(外国人総入場者数 3,350人)

東京都からの協力依頼による「ウエルカムカード」は、外国人旅行者を対象とした入場料金の割引サービスであり、都内の美術館・博物館・動物園等が参加する企画である。ガイドブック・マップなどを7カ国語で作成し、空港・観光案内所・ホテル等の宿泊施設を対象に375,000部を配布するもので、広報効果も高いと考える。

なお、平成16年度も継続して協力する。

エ. 近隣施設との連携企画

北の丸エリア「沿線メトロウォーキング」に協力し、常設展及び特別展を団体割引料金とした。

「沿線メトロウォーキング」は帝都高速度交通営団が主催する事業で、北の丸エリアの美術館等施設が参加する企画であり、営団地下鉄が各駅にポスター、チラシを配付するもので、広報効果も高いと考える。

(4) その他の入館者サービス

特別展(共催)開催に際し、従来のチケット委託販売に併せ、当館券売所においても前売券の販売を行い、来館者へのチケット購入の利便性の向上を図った(「今日の人形芸術」展、「青木繁と近代日本のロマンティズム」展、「国吉康雄」展で実施。)

常設展フロアプラン(会場ガイド)について、これまでの日・英の二カ国語版に加え、(財)東芝国際交流財団の助成を得て、独・仏・中・韓の4カ国語版を新たに作成し、外国人来館者へのサービス向上に努めた。

これまでの毎月第1日曜日の常設展及び文化の日(特別展も含む)に加え、平成15年度は、5月18日「国際博物館の日」も常設展観覧料金を無料とし、好評を得た。

来館者プレゼントとして、「国際博物館の日」にはポストカードセットを、年始1月2日～4日には展覧会ポスターを進呈する等の来館者へのサービス向上とリピーター増進に努めた。

共催展「野見山暁治」展、企画展「三代藍堂 宮田宏平」展においては、作家に協力依頼を求め、会期中に数回のサイン会を実施したところ、来館者から好評を得た。

4. 一般入館者等の要望の反映

観覧者の苦情、アンケート結果を踏まえ、営団地下鉄と協議して、駅ホーム内の美術館の案内表示を明瞭化し、また東京都に依頼して地下鉄出口の交差点の案内板を新設するなどの整備を行い、来館者への誘導案内に工夫をした。

平成15年度より「チケットぴあ」と年間販売委託契約を結んだことで、展覧会情報の掲出回数が増加し、また、情報誌、美術雑誌を中心に、展覧会の情報掲出をする等、広報活動の促進に努めた。

北の丸公園周辺という立地条件を踏まえ、来園者が多い四月上旬及びゴールデンウィーク中の月曜日を閉館した。また、年末年始については、従来休館日であった12月27日、12月28日、1月2日を閉館日とし、来館者の利用機会の増進を図った結果、多数の来館者があった。

(年末年始閉館日の入場者数：本館 130人(27日)、234人(28日)、291人(2日)
工芸館 101人(27日)、194人(28日)、454人(2日)

5. レストラン・ミュージアムショップの充実

美術館4階休憩室に飲物の自動販売機(販売価格を安価に設定)を設置し、休憩する来館者へのサービス向上を図った(9月は1,900件以上の利用があり、現在も概ね月に1,000件以上の利用状況である。)

ミュージアムショップについては、共催展の関連グッズはもとより、当館主催の特別展・企画展に伴う展覧会の関連書籍コーナーを設けるなど販売品の充実に努めた。また、当館所蔵作品をモチーフとしたオリジナルグッズ(手ぬぐい等)の開発販売に努めた。

また、工芸館では狭隘なスペースの中、関連書籍、雑誌、現代作家による陶芸作品を販売し、「今日の人形-想念の造形」展、「現代の木工家具-スローライフの空間とデザイン」展開催時には、出品作家の執筆書籍、作家制作による人形及び木工作品を販売するなど、展覧会の特色を活かした販売物の充実に努めた。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取り組み】

常設展のアンケートを実施するにあたっては、より多くの情報を収集するため、展示替え毎(5回/年)に調査を実施した。また、多様化する来館者のニーズに対応するため、展示内容・講演会等についても、より詳細な情報を収集するために、調査項目の細分化と充実に図る準備をした(平成16年度より実施予定。)

また、当館主催の特別展において、ホームページ、展覧会チラシ、割引券、栞(外部委託)等に試行的に割引引換券を付し、割引料金制度を導入した。(実績は以下のとおり)

本館 特別展「旅-『ここではないどこか』を生きるための10の』レッスン」

(利用率) 13.97%(有料入場者) 8.20%(総入場者)

特別展「ヨハネス・イッテン-造形芸術への道」

(利用率) 17.82%(有料入場者) 14.19%(総入場者)

工芸館 特別展「現代の木工家具-スローライフの空間とデザイン」

(利用率) 11.03%(有料入場者) 5.80%(総入場者)

*参考 共催展「青木繁と近代ロマンティズム」

(利用率) 4.25%(有料入場者) 1.78%(総入場者)

共催展「野見山暁治」

(利用率) 7.72%(有料入場者) 3.67%(総入場者)

共催展「国吉康雄」(H.16.3.23~3.31)15年度

(利用率) 13.53%(有料入場者) 8.92%(総入場者)

工芸館の企画展開催に際し、関連する学校・教育施設等の関係者との懇談会を開き、展覧会の趣旨・目的を説明並びに意見交換等を行うなどの広報活動から来館者の増加に努めた。

【見直し又は改善を要する点】

平成15年度は、国際博物館の日を開館とし、年末年始の閉館期間を縮小するなど、より多くの観覧機会の提供に努めたが、平成16年度においては、特に多数の来館者が見込まれる展覧会開催に際し、混雑緩和の観点からも、月曜日開館の実施を検討する。

また、外国人向け対応については、従来から作成している、日・英併記の出品作品リスト、フロアプラン（会場ガイド）の日本語版、英語版に加え、平成15年度は、独・仏・中・韓の4カ国のフロアプランを新たに作成し、外国人来館者へのサービス向上に積極的に努めた。今後も、ミュージアムカレンダー（展覧会案内）の英語版等、会場配布物の多言語化に努めるなど、受け入れ態勢の充実を図り、外国人来館者への対応の充実を図る。

さらに、今後、美術館2階休憩室及び工芸館休憩室への飲物の自動販売機の設置を検討し、より一層のサービス向上に努める。

なお、常設展会場においては、従来より記念撮影程度の範囲で撮影を許可していたが、観覧者からの作品撮影についての要望が多いため、許可する方向で検討し、サービス向上に努める。